

---

# けんむす

ニエル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けんむす

### 【Nコード】

N4740W

### 【作者名】

ニエル

### 【あらすじ】

【てんむす編 1〜27】 彼は今日も村で過ごしていました。

隣人の男は冒険者になるために、隣人の女は勇者と旅をするために村を出ていきました。ある日、彼に転機が訪れます。

【接続編 28〜】 ヒトは天に憧れ、繋がることを夢見ます。

ここはヒノ村。

祖父が拓き、父と母が整えた小さな村。  
そんな村で俺は今日も暮らしている。

「右隣のマグが中央に行ってから2週間、特に変化はなかったな」

畑を耕しながら声をかける。  
流れる汗をついでに拭う。

「君の友達が減ろうとも、畑仕事は減らないからね」

返事するのはイコ。  
俺の可愛い家族である。

「左隣のアルが勇者にホレて一緒に行ってしまった」

朗らかな陽の光を浴びながら丸くなっているイコがちらりと俺を見る。

尻尾がゆっくりと左右に揺れる。

「小さい頃に君と結婚の約束をしていたのにね」

ああ、人生はなんと儚いのだろうか。

演技掛かった眩きはそんなものとイコに切り捨てられた。

「勇者とか死ねばいいのに」

「あまり大っぴらに言うものじゃないよ 不敬罪で縛り首なんてな  
ったら目もあてられないよ」

父の形見の剣を持って行った今はいない勇者に文句を言う。  
いないのだから文句が言えるのだけだ。

「腕に自信のあったマグは一流の冒険者を目指して中央へ 村一番  
の美女だったアルは勇者のお供」

「その友人だった君は畑を耕す、と」

切ない話だ。

人生って本当に切ない。

「マグのギフトなら成功するかもしれないな 探索者として名声を得るかもしれない」

「アルは器量が良かったからね 勇者と結婚するかもしれないよ」

友人たちが妬ましい。

怨みで人が殺せたらと思えるほどだ。

「ああ、妬ましい」

「なら一緒に行けばよかったじゃないか」

一緒に行っても死ぬだけだとわかってるのに行くわけないだろう。マグのような実用的なギフトが羨ましい。

「マグは加速のギフト持ち、俺のギフトは迷宮じゃ役立たず」

「ギフトが微妙なアルでも勇者にホレて付いて行ったけどね」

勇者のお供ってなんだよ。

俺は生きることには主を置いているのだ。

「本当に忌々しい 世界滅びろ」

「国が世界のために勇者を呼んだのに真っ向否定ってどうなんだろ  
うね」

正義の勇者とか眉唾すぎる。

どうせ他国への牽制のためだろう。

「世界のためなら税を減らせ 暮らしを楽ししろ」

「民は国の財産だから、どうしようとも自由なのさ」

シレッと言い切るイコを見るも目線はどこへやら。  
鈴を思わせる澄んだ少女の声なので腹も立たない。

「財産の管理くらいちゃんと行って欲しいな」

「金銀財宝の前では小銭なんて飾りにすらならないのさ」

世知辛い。

この世に救いはないのだろうか。

「生きるってなんだろうな」

「なんだろうね」

イコには尻尾が九つある。

月の様に静かに輝く銀色の毛がとても綺麗なキツネである。

「……幸せってなんだろうな」

「君のご飯が食べられることかな」

イコはときどき人間の少女の姿になる。

キツネの耳と九つの尻尾が生えている彼女はとても綺麗である。

「……恥ずかしいやつだな」

「君は難しいやつだね」

楽しそうに笑うイコを見ると何も言えなくなる。  
俺の可愛い家族である。





晴れた空の下、今日も畑仕事。  
変わらないからこそ、日常なのである。

「マグから手紙が届いたぞ」

俺の右手には古ぼけた紙切れ。  
友人であるマグからの手紙である。

「へえ、それは良かったね」

イコは今日も丸くなっている。  
ふわふわの尻尾を触りたくなるが我慢する。

「冒険者になったから迷宮に挑戦している、だってよ」

「順調なことはいいことさ」

迷宮には危険と宝が眠っている。  
ダンジョン  
出入り口を国が管理し、探索は冒険者や騎士が行っているとか。

「一攫千金か 夢のような話だな」

「夢は叶わないのさ」

夢は見るモノってことだろう。

俺のギフトが探索向けだったらどうなっていたらだろうか。

「アルからも手紙がきてた」

「あまり良い予感がしないね」

白い上質紙に真っ黒のインク。

手紙だって無料ではないのだが、勇者の余裕が見て取れる。

「要約すると『勇者カツコいいけどモテる 結婚したい』だってよ」

「なんとなくか、アルって頭がおかしいよね」

否定はしない。

結婚の約束をしてきたときは畑の真ん中だったし。

「お金に余裕がないから返事を書けないけどな」

「村人の限界だね」

マグですら手紙を書く余裕があるというのに。  
ファーストジョブが村人は伊達じゃない。

「今日も汗水たらして働いて、薬草を栽培しても税として持って行かれて、売っても二束三文」

「世知辛いね」

魔物に襲われても、盗賊に襲われても、戦争があつて兵士に略奪されても運が悪かったとして諦める。  
村人が成り上がるには奇跡が起きなければならないのだ。

「何事も努力すれば成せるわけでも無し」

「現状打破のために冒険者になるのも間違ではないけどね」

ギフトで上級の冒険者になれるかもしれないし、偶然組んだ仲間が凄く強くなるかもしれないし、奇跡が起きてなんらかで成功するかもしれないし。

冒険者も多分に運が絡んでいるモノだ。

「富、名声、権力 縁遠すぎてなんだかわからん」

「村を離れて一緒に行けばよかったじゃないか 誘われていただろ  
う？」

イコの揺れる尻尾を見つめながら思い出す。

行商人とともに村を出たマグに一度だけ誘われたが断ったことを。

「俺が村を出るわけないだろう」

「そうだね 滅ぶ結果は目に見えているよ」

祖父に頼まれた。

父と母に頼まれた。

「出て行かないのは俺の意思だ」

「でも羨ましいんですよ」

村人がいなくなるまで。  
村の皆を見守るように。

「羨ましいのは本当だ」

「なら行けばよかったのに」

祖父との約束。  
父と母との約束。

「これだけは破るわけにはいかない」

「……」

だから俺はここにいます。  
約束を守るために。

「イコは好きにしていんだが」

「好きにしてるからいるんだよ」

ああ、こいつは恥ずかしいやつだったんだ。  
顔が赤くなつたのを隠すためにそっぽを向く。

「……ならいいけどな」

「うん、いいんだよ」

笑い声が聞こえる。

ホントに恥ずかしいやつである。

「まあ、実際についていっても野垂れ死ぬだけだしな」

「カッコ悪いね」

自分でも承知しているが改めて言われたくはないのだ。  
うるさいやつである。

燦々と輝く太陽。  
罅割れた大地。  
乾燥した空気。

「雨が降らんね」

「そうだね さすがのボクも困っちゃうね」

銀色の綺麗な毛並みのイコだが、日の光を反射して眩しい。  
弱々しくへばっているのは暑さに苦手だからだ。

「このままだと薬草も枯れてしまっ」

「大変だね」

そう、大変なのだ。  
だからといって解決策があるわけでもない。

「井戸も余裕がないだろうに」

「そうだね　ここ最近、ずっと晴れてるもんね」

困ったものだ。

いつもならこの時期は降るはずなのだが。

「魔法で雨を降らせたりできないのか」

「そんな魔法は使えないよ　燃やすなら簡単だけど　カラカラだからよく燃えるよ」

イコは魔法が使える。

火系統しか使えないのが玉に瑕だろうか。

「魔法も万能じゃないな」

「人間だと学問の一種として捉えているし、簡単なものではないんだよ」

魔法なんてよくわからんが、一筋縄ではいかないらしい。

勇者とか魔人などは魔力に物を言わせて結果を呼び寄せるとかできるらしい。



「魔法に夢を見るのはやめるか」

「夢は叶わないからね」

どうやら現実は厳しいようだ。  
俺からしたら魔法が現実的ってよくわからんが。

「このまま雨が降らなかつたら今年の税が払えなくなるぞ」

「人間は大変なんだね」

フォックステイルのお嬢さんには関係ないのだろうか。  
いや、俺の家族なんだから関係あるに決まっています。

「余裕ぶっこいているイコは気付いてないだろうが、極論として」  
「飯がまずくなる」

「大問題じゃないか」

危機に気付いたイコは顔色を変えるも暑さにへばって結局横になっ

たままである。

獣型は毛皮により体温上昇、人型になっても耳と尻尾が暑いという  
どっちつかず。

「雨が降ればかなり助かるんだが」

「何か燃やして煙で雲を作るとか聞いたよ」

父に聞いたのだろう。

この澄み渡った青空の下では効果無しに違いないので却下。

「どうしたものか」

「どうしようね」

村人がまた減った。

中央のようにここよりも条件のいい場所を探しに出たのだろう。

「ほぼ全員が死ぬだろうな」

「魔物がいる森を抜けるのは大変だからね 新天地探しというよりは死地を求めている様にしか思えないよ」

力のないモノに世界は優しくないのだ。  
希望もなく死ぬのだろう。

「村から出て死んだら俺には関係ないからいいけどな」

「君は村に縛られてるだけだもんね　ここは安全なのに出ていくのはなんでだろう」

ただの村人だった人間が外に出たら魔物に襲われて終わりである。  
ここら辺の魔物のランクは知らないが、襲われたら絶望的なのは間違いない。

「夢みてるんだろ　しかし雨が降らんな」

「夢って凄いな　ホントに雨が降らないね　ボクもそろそろ限界だよ」

垂れた尻尾がイコの限界を知らせてくれる。  
情けなさも漂ってくる。

「ああ、そういえば隣村も被害が大きいらしい」

「  
だろっね」

暑さにへばったイコを抱えて家に戻る。  
こんなでも俺の可愛い家族だからだ。

枯れた大地。  
渴いた作物。  
たれたイコ。

「マグから手紙がきた 順調に探索が進んで、迷宮でエルフの美女を助けて仲間にしたらしい」

「そうなんだ ボクが苦しんでいるのにいい身分だね」

暑さでイラついているらしい。

戦争になったらすぐに駆り出される冒険者がいい身分なのは当たり前と思うべきなのだろうか。

「そうカリカリするなよ マグも頑張ってるんだから、多分」

「他人の努力とかそんな紙きれ一枚とかよりも水が欲しいよ……」

行商人が届けてくれたのだが、村の状態を把握していたのか高い値段で水売っていた。

商売だから仕方ないのかもしれないが、買うには厳しいので諦めた。

「悪いな 買うにしては高すぎて手が出せない」

「わかつているよ 我慢するから大丈夫」

イコには悪いが諦めてもらおう。  
左隣は家には水がたくさんあるらしい。

「アルが勇者のパーティにいるから懇意にしてもらおうってことだ  
ろう」

「村は次いでつてわけだね ああ、忌々しいよ」

同意ではあるがアルがいなかったら行商人が来なかったかもしれないので何とも言えないわけだ。  
来ても来なくても変わらないよな気がするけど。

「そのアルから手紙がきた」

「いい紙を使っているね ホントに忌々しい」

書いてあることが脳天気すぎる。  
俺を煽っているに違いない。

「内容は惚気話とモテモテ勇者にホレたライバルたちとの争いの話だ」

「ゴミだね」

もったいないゴミだ。  
どうにかして汚れを消せないだろうか。

「しかし、勇者も凄いよな 別の世界ってやつから呼ばれて魔王を倒すって凄くね？」

「見ず知らずの国のために命がけてお人よしを軽く超えてるよね」

国がヤバいんで助けてくださいっていきなり呼ばれて助けるってどんな精神しているのだろうか。  
隣村ですら急だったら断る俺にはわからない。

「ああ、でもモテモテでいいモノ食って何しても自由なんだっけ」

「そんな感じの特権もあるけど国の財産だから命令が下つたら従う必要があるね 命令は兵器としての役割がほとんど」

一時の贅沢のために命差し出すのは無理だな。  
憎いけど勇者すげえな。

「その勇者に命を狙われる魔王ってどんなやつだろうな どこにいるかすら知らないんだけど」

「魔王なんて理由付けのためにいるようなものだからね」

隣の国で欲しいモノがあつたら勇者を送り込んで魔王討伐のためって名義で占拠することもあるとか。  
ああ、だから勇者を召喚するのか。

「かなり醜い理由だったな、魔王討伐 大義名分ってやつだろ」

「うん、権力を得ると魔王の便利さがわかるらしいけどね」

一生俺には縁のない話だろう。  
権力云々の前に水がない。



「魔王でもいいから水をくれって感じだな」

「貴族が聞いたら禁固刑だよ」

貴族なんて見たことないから恐れようがない。

魔王討伐よりも水くれ。

「居もしない魔王を討伐って勇者が滑稽だな」

「一応いるよ 今は迷宮の最下層で眠っているけど」

魔王はいるらしい。

勇者に追われているのに眠っているとか余裕過ぎだろ。

「そのまま勇者も迷宮に突撃してくれればいいのにな」

「勇者には知らされてなかったり、国も知らなかったりといういろいろあるんだろうね 虱潰しに探しているって感じだし」

なぜイコが魔王の居場所を知っているかが気になるが俺には関係ないから聞かないでおく。

魔王を追っているのに国の利権のために働くって勇者も嫌な職だな。

「勇者もわざわざ魔王を追わずに自由にすればいいのに それくらい余裕だろ」

「魔王を倒すと元の世界に帰る事ができるって言われてるからね 従うでしょ」

なかなか国もやることがあくだい。  
まあ、許さないけど。

「勇者も世知辛いな」

「何にでも良いこと悪いところがあるもんだよ」

じゃあ、今のこの生活にもいいところがあるのか。  
……平和なことくらいか。

「でも悪いところの方が多いな」

「良いところはボクと一緒にいられることって言って欲しかったな」

さすが恥ずかしいやつだ。

にこにこしながら言うとは反則である。

「それはどんなことをしていてもだろ 今の生活に限った良さじゃない」

「ああ、そっか」

暑さでへばっていたクセに今は上機嫌で尻尾を揺らしている。  
恥ずかしいけど可愛いやつである。

降りしきる雨。

恵みの雨ってやつである。

「久しぶりの雨だな」

「いくら涼しくなってくれてボクも嬉しいよ」

窓から外を眺めているイコは機嫌がいい。

暑いのが苦手な彼女は家でんびりしているのが好きなのだ。

「そうか まあ、薬草も枯れなかったし俺としても嬉しい限りだ」

「薬草が枯れると雑草にすら劣るからね」

今はすぐに傷が治るポーションがあるから薬草もそこまで重要ではないのだ。

そのうち薬草が市場から消えるかもしれないので雑草と覇権を争うことに……ならないな。

「中央への移住を決めた人が増えてきたようだ」

「ここも年々住みにくくなってきたからね」

魔物の生息域をくり抜いたように作った村である。

外部から人が訪れることはほとんどなく、来るのは傷だらけの旅人や冒険者を雇った行商人などの奇特な人たちだけだ。

「あの商人もこんな薬草を買いにこんな辺鄙な場所に来るとか凄いやな」

「国もわざわざ税として取りに来るんだもんね」

不思議な人々だ。

泡銭にしかない薬草を買うためにここまで来るのだから。

「味が好きとか？」

「ただの雑草と変わらないでしょ」

雑草と同じだと言われるのは悲しいが否定はできない。

磨り潰した薬草の汁をアンデッドモンスターにかけると即死するか

ら聖水いらずではあるのだが。

「でも戦ってる最中に薬草ってどうよ」

「薬草をもしやもしやしながら戦う歴戦の勇者とかカッコがつかないね」

右手に聖剣、左手に薬草で魔王と熱く戦うとか子供の夢が壊れる。ポーシオンはかけるだけって聞くから偉大だよな。

「いや、もしかしたら磨り潰した薬草の汁をかけるとか」

「特にアンデッドに効くけど魔物にも効くから魔王にも効くかもね」

互いに薬草の汁塗れで戦う最終決戦。  
カッコ悪いし、薬草の青臭さが涙を誘う。

「ポーシオンはすげえな 見た目もカッコいいし」

「戦いのための薬って感じがするもんね 『薬草』だと田舎っぽいけど、『ポーシオン』だと都会っぽい」

傷に薬草使うよりもポーション使った方がオシャレだよな。  
様式美的な意味もあるのかもしれない。

「まあ、俺みたいな村人は薬草で我慢するしかないけどな」

「薬草の汁ってカツコ悪いよね」

イコの呟きを無視して薬草を煮詰める。  
見た目は金色の汁なので悪くないと思うのだが。

「雨の時の内職だ 仕方ないだろう」

「いいけどね ちなみに普通の薬草って緑色なの知ってた？」

「……え？」

金色じゃないのか？

止まない雨。

湿気がべたべたでイコの毛がもさもさである。  
毛繕いが大変だ。

「マグから手紙が届いた」

「また？」

定期的に届くこの手紙。

イコはうんざりしている様子だ。

「また、だ 返事もしていないのにな」

「友情ってやつかもね」

ホントのところはどうなのだろうか。  
俺にはわからない。

「内容は『パーティが女性ばかり 探索は順調』だによ ハーレム



を知らせられても困るんだがな」

「そっちの様子はどうか？みたいなことが書いてあったのに完全に今は無くなっただね」

自分の近況を書いているだけになった手紙を見ながらマグを思い出す。  
……どんな顔をしてただろうか。

「マグってどんなやつだったけ」

「忘れたとか？」

ジト目で見られても覚えていないのだから仕方ない。  
というかそんなに仲が良かっただろうか。

「正直、あんまり覚えてない」

「ボクもおぼえてないけどね」

イコも覚えていないらしい。  
常に俺と一緒に行動しているイコが覚えていないのだからそんなに仲がいいってわけでもないのだろうか。

「でも手紙が来るしなあ」

「マグの友達が少ないとか」

友達がいないから面識がある俺が繰り上げで親友ポジションになったとか。  
なんかしつくりきた。

「ああ、可哀相なやつなんだな」

「順調に迷宮を進んでいる相手に言う言葉とは思えないね」

確かに。

俺なんてただの村人だし。

「心なしが良質の紙を使っているし」

「ホントに順調なんだろうね」

そういうところは羨ましい。

あとギフトが加速とかも羨ましい。

「そしてまた紙が届けられたわけです」

「無料で上質紙を送ってくれるなんていい人もいるよね」

欠点は紙の片側に黒い染みがあることだろうか。

適当にしみ抜きして乾かせば使えるようになるはずだしこれくらいは我慢しよう。

「ホントにな　まあ、今は紙の使い道がないがそのうち使うようになるだろうし」

「どうせならインクも送ってくればいいのにね」

全くだ。

まあ、無料なので文句を言うのはお門違いだろう。

「隣村の川が氾濫するかもしれないとか」

「川の近くなんだし、当たり前といえば当たり前だね」

隣村、と表現しているがこの村よりもかなり遠い。

魔物の生息域のど真ん中にあるこの村と違ってぎりぎり人間の生活圏にあるからだ。

「まあ、凄い雨だからな」

「そうだね そろそろ川ができるかもね」

大雨の後は空に川が出来るのだ。

雲と同じ高さに現れる川なので泳ぐことはできない。

「いつも思ってたがああ川ってどこへ流れてるんだ？」

「あれは七国の中心まで流れてるんだよ 他の国からも同じように流れてるけどここからじゃわからないね 川にはアルファが漂っているから泳げばすぐに見つけられるかも」

この村があるのは外周と呼ばれる魔物の生息域である。

外周のさらに外側から魔力が吹き出し、魔力流として空を流れ、一か所に降り注いでいるのだとか。

「アルファ？」

「空を漂っている国さ」

七国は勇者を召喚できる主な国を指していて、歪な円を描くように連なっていたが今は違うらしい。

アルファというのは七国の中心にあった国で今は飛び立ってしまったので七国は円環の状態になり、その中央へ魔力が流れていて雨が降ると川ができるのだとか。

「壮大な話だな」

「ボクたちには関係ないことさ」

確かに村人には関係のないことである。

ちなみにアルファが空にあるので地上には勇者が召喚できる国が六つしかないとか。

「俺らに関係あるのは夕飯をどうしようかってことだ」

「今日はシチューが食べたいね」

イコは色々なことを知っている。

見た目も昔から変わらない見惚れるような可愛い少女の姿のまま。

「今日はそうするか」

「ホント？ 嬉しいな」

そんなイコは食べることが大好きだ。  
そして俺はそんなイコが大好きなのだ。

雨である。

しかも大雨。

雨が降らないと文句を言ったのが懐かしいほどに雨が降っている。

「隣村が大雨でヤバいらしい」

「そんなことを前にも言ってたよね　確かに大雨が続いてたら大変だもん」

村人総出で移住するとか。  
宛てはあるのだろうか。

「失敗するだろうな」

「するだろうね」

老人や女子供は大変だろう。

その決断を選ばざるを得ないところまで追い詰められたってことか。

「ここまで来るつもりだろうか」

「ここまで来れるわけないよ 外周はとても危険なんだ」

そうでもないと思うがとても危険な場所らしい。

ここは外周の中でも比較的安全に違いない。

「中央を目指す若い衆もいるとか」

「労働力や防衛力が更に減るんだ ほとんどが死ぬだろうね」

俺もそう思う。

魔物も出るだろうし、盗賊だって蔓延っているし、家財だって運ばなければならぬ。

「命を賭けた戦いだな」

「人生に一度くらいはあるだろうね」

命を賭けることなんて一度でも多いと思う。  
そんな機会、できれば一生出会いたくない。



「移住と言えば左右の家が中央に移るんだとさ」

「こんな大雨の中を？」

普通は正気が疑うところである。

さっきまで話していたことも相俟って。

「竜籠で行くんだとよ」

「竜か それは凄いね」

竜というのは魔物の上位種らしい。

外周でも絶対に安全、といえるわけではないが徒歩や馬車よりも安全なのだとか。

「遠い世界だな」

「そうだね 龍なら簡単に見つけられるけどね」

龍、それは魔物の頂点。

魔力流に住んでいる最強の種族らしい。

「竜とは違うのか」

「竜は魔物が進化した姿で龍は龍として生まれた存在だからね  
格が違うよ」

竜がさらに頑張って進化すれば龍に届くかもしれないらしい。  
薬草とポーシヨンの関係みたいなものだろうか。

「ふうん」

「興味ないって顔だね まあ、いいんじゃないかな」

イコが嬉しそうに微笑んでいる。  
ずっと一緒にいるが未だに感情の機微がわからない。

「……そんなものだろうか」

「どうしたの？」

「いや、なんでもないとイコに伝える。」

俺に女心を理解することは一生かかっても無理だろうと母に言われたし、実際そうなのだろう。

「今日のご飯はどうするか」

「バカ勇者が保存食を持ってちゃったからね」

保存の効くモノを持って行くとかホントにやってくれる。  
食べ物と思い出を同時に奪うとか悪魔の権化としか思えない。

「不敬罪とかじゃないのか」

「誰も気にしないよ みんなそう思ってるもん」

村中の家から物を勝手に持って行ったけど、あんなにも沢山の物をどこに入れたのだろうか。

わざわざ危険らしい外周まで来て家探しとは勇者もツワモノだ。

「すまん」

「君に謝って欲しくて言ったんじゃないんだけどな」

困ったように笑っている。

俺が謝ればイコはすぐに文句を言わなくなる。

「まあ、薬草の汁はたんまりあるから」

「それはどうでもよかったり　なんで赤くなってるの？」

俺は文句を言っている姿よりも笑っている姿を見たいのだ。  
ちよつと恥ずかしいけれど。

「いいや、なんでもない」

「そう？」

いつまで続くのだろうか、この雨は。  
イコは雨が好きらしい。  
なぜだろうか。

「マグさんからのお便りです」

「え、また？」

そう、『また』である。  
竜籠でついでに持ってきたらしい。

「噂話とか聞けるから俺としては都合いいんだが」

「竜使いの人からでしょ 手紙が完全についでって感じだね」

否定はできない。  
自慢話しか書かれていない手紙に意味は無いからだ。

「内容もあまり変化なし 個人とギルドのランクが順調に上がっていることとか女性の嫉妬に板挟みとかの話しかない」

「ホントに順調なんだね 竜籠を呼べるって凄いよ」

そういえば凄いのかも知れない。  
俺には関係ないのだが。

「俺になんらかの利益があるんなら諸手を挙げて応援するけどな」

「期待の探索者の直筆の手紙として売るとか」

売れるのだろうか。

ちなみに探索者とは冒険者の中でも迷宮の探索に重きを置いている人のことだ。

「また無料の紙が届いたわけだ」

「毎度のことだけど嬉しいね いい紙だし」

輝くような白さとはこのことだろう。

凄くいい紙ではあるのだがラクガキがあるのが欠点だ。

「ラクガキはやめてほしいだろ、常識的に考えて」

「贅沢なラクガキだよな」

洗濯するときに使う薬草を溶いた水で洗うと紙が綺麗になることに  
気付いた。

紙がふやけてしまうので改良の余地があるけれど。

「隣の家が移住したのを見て危機感を募らせたのか、ここの村人も  
総出で引っ越してしまった」

「仕方がないよ 止まない雨と竜籠なんて見たら世界の終わりっぽい  
もん」

確かにどこことなく世紀末っぽさを感じる。

恐怖に駆られて逃げるのも頷けるというものだ。

「みんなどこへ行くんだろうな」

「どこにも行けないと思うよ 外周から抜けられるはずないもの」

やはり魔物は脅威なのだろう。  
ここら辺の魔物はあまり強くないのだが数が多いとかそんな感じだろうか。

「村としては終わりだな 廃村決定に違いない」

「余裕で大丈夫だよ 村長の君がいて、村人のボクがいる どこからどう見ても村でしょ？」

どう見てもごっこ遊びです。

家や畑が無かったら可哀相な人たちに分別されてしまう。

「まあ、いいか 祖父が拓いて、父と母が整え、俺が潰すとか避けたいからな」

「うん、いいと思うよ というか中央に行くって発想はないのかな？」

イコが村を続けられるって言ったから乗ったのだが。  
中央に行く気は無い。

「今のところは全くないな それとも村は嫌か？」



「ボクは大歓迎だよ 煩わしいモノが無いって素晴らしい」

イコは人間に合わせるのが苦手なのだ。  
このほうが楽なのかもしれない。

「機会があつたらそのうち中央へ行くのもいいかもな」

「そうだね いつになるかはわからないけど、それも楽しいかもね」

俺は村長である。  
セカンドジョブ・村長とか着実に昇進している。

魔法というのは実に凄い。

現実的といコが言っていたが、俺からしたら魔法は夢のようなものだ。

「雨降りすぎだろ」

「こんなに降ってたことってあったっけ」

俺の記憶には無い。

記録的な大雨のはずだ。

「しかし魔法って凄いな」

「ボクの魔法は暑いときには役に立たないけど雨とか寒さには便利だからね」

雨で畑がぐずぐずにならないように火球で畑を乾かしている。

一家に一人はイコがいれば雨季の畑仕事も大助かりである。

「村全体を乾かしたりとかできないのか」

「村が全焼してもいいのならすぐに出来るよ」

やはり都合よくはいかないらしい。

乾かすために全焼とかリスクがでかすぎる。

「税の徴収がきたんだがな」

「そういえば来てたね、この雨の中　ここって外周だから凄いなと思うよ、人間の欲って無限大だね」

雨だから魔物も活動を控えていていつもよりは楽だったらしい。  
村の状態を見て周っていた。

「廃村決定だとき　国から切り捨てるので自由にしていって言うわれてしまった」

「どうしようもないって感じだもんね　とうとう独立したってことかな」

国公認で独立した村とかここだけかもしれない。  
もしかしたら俺は村長という名の王……無いな。

「独立というか捨てられただけだな　今までと変わらないだろ」

「税を取られないとか、廃村認定だから人が来なくなるとか色々あるけどね」

商人が来なくなるのは困る。  
そのうち買い出しに出なければならぬだろう。

「薬草を収穫したら売りに中央まで行ってみるか」

「いいかもしれないね　中央を見ても面白いかも」

薬草の収穫まではまだかかるのだ。  
じつくりと時間をかけても文句を言う人はいない。

「イコは俺を否定しないから独裁者になりそうだ」

「それも面白いかもね　望むならボクを好きにしてもいいよ」

にににしながら言うことではないと思う。  
毒気が抜かれてしまった。

「あー、まあ、そのうちな」

「そのうちしてくれるんだね　楽しみだな」

もうなんとも言う方がいい。  
恥ずかしいやつめ。

ここはヒノ村。

祖父が拓き、父と母が整え、俺が治める小さな村。そんな村で俺たちは今日も暮らしている。

「マグから手紙がきた」

雨を眺めているイコに声をかける。  
彼女は雨が好きなのだ。

「未だに届けるってすごいよね」

アルという阿婆擦れと一緒に届けているから大丈夫とかなんとか。それでも手紙を届けるだけに竜籠ってバカだろう。

「依頼で強い魔物を倒したらしい」

「探索者がクエスト解決とは珍しいね 迷宮を探索するのが目的なの」

迷宮で知り合った女の子に頼まれた依頼でわざわざ中央から出て解決したらしい。  
女絡みの話ばかりだが女運が悪いのだろうか、それとも良いのだろうか。

「討伐したのは湖に住む『スキュレイ』って魔物らしい 外での戦闘は迷宮と違って大変だったとか」

「スキュレイを討伐とは驚いた マグたちは気付いてないのかもしれないけどスキュレイは下級の竜だよ 迷宮に入って数か月の人間が勝つには厳しいレベルだと思ったけれど」

スキュレイは水辺を好んで生活し、竜種としては戦闘力が低いが魔物の中ではかなり強い。

水属性の魔法を操るので水の存在するフィールドだと強さに補正がかかるのだとか。

「凄いことなのか」

「下級に分類されていても竜は竜だからね」

竜は魔物が進化した姿だと言っていたし、魔魚とか半魚人から進化したのかもしれない。

魔魚からの進化だとしたら陸上に揚げられてぴちぴちしている竜と

いうカツコ悪い姿を想像してしまった。

「竜にもさまざまな種類がいるんだな 人種みたいなモノか」

「種類がたくさんいるのは元の魔物が違うから 成長を続ければ最終的には全てが亜龍になるから人種とはちょっと異なるかもね」

竜も頑張れば亜龍という龍になるってことらしい。

龍という存在はそれだけ隔絶した力を持っているってことなのだろうか。

「つまり竜は料理的なモノか 最初は別々の材料だが最終的には一つの料理になる、みたいな」

「ふふ、そんな感じかもしれないね ヒトも英雄になれるから大きく見れば竜と同じかもしれないね」

人間と亜人を一括りにしてヒトと表現するらしいが分類の方法は聞かなかった。

ヒトでは成し得ないであろう奇跡を起こした唯一に送られる称号が英雄だとイコは説明してくれた。

「称号とかじいさんが死んだときに得た『ヒノの後継者』しか持つ



てないな」

「十分だと思うけど、他に欲しいなら手伝うけど？」

欲しくないので手伝わなくていいです。

称号の取得条件は多岐に渡るが、根本は仕様をこなせばいいらしい。

「興味ないな」

「言うと思ったよ。ああ、でもスキュレイを倒したなら呪いが大変だね」

確かに手紙には呪いをかけられたと書かれているが今のところマグやパーティに被害は無いらしい。

警戒していても仕方ないので近いうちに迷宮の探索に戻ることも書かれている。

「影響はないらしいぞ。呪いも失敗したんじゃないのか？」

「いいや、成功しているね。雨が降り続けているのが証拠だよ」

スキュレイの呪いは雨が降り続くことである。

自らを殺した者の魔力を追って、大雨ですべてを憎悪の続く限り洗

い流す。

「なるほど この大雨はマグのせいかな」

「マグの家があるここは魔力が残っているから雨が降っているんだろっね 隣村にも何か彼が身に着けていたモノがあるんじゃないかな」

この分だとマグが訪れた場所のほとんどは大雨に違いない。中央は国の中心だから大雨でも気にするほどの被害は受けないのだろっ。

「どのくらい降り続くんだった？」

「わからないけどまだまだ続くと思うよ 竜の呪いだし、ひと月じや効かないかもね」

このままでは村が水没するか、薬草が腐るかしてしまう。引っ越して空き家状態なのでなくなっても構わないだろう。

「隣の家を燃やすか そしたら魔力云々じゃなくなるだろ」

「いい案だと思うよ　ボクが魔力を分解してもいいけど家一軒分を隅々まで触るのは大変だから」

燃やし尽くすことが決定した。

普通に燃やすよりイコの炎のほう灰などにも魔力で上書きできるから効果的だとか。

「見事に消し炭になったな　ここに家があったなんて誰も気づかない」

「スキュレイの呪いはおそろしいね」

これが呪いの目的だとしたら確かにおそろしい。  
灰が積もっているマグの家の跡地でスキュレイを相手にする恐ろしさを学んだ。

「そっといえばマグの手紙も魔力が籠ってるよな」

「その程度ならボクが分解しておくよ」

簡単な物はイコがギフトで魔力を分解してくれました。  
可愛い家族は俺が出来ないことを平然とやってのけるのだ。



マグの家、焼失。

止まない雨。

染み抜き。

「こつやって薬草の煮汁を使えば紙が金色になるから高級感も増すわけだ 汚れも誤魔化せるから高級紙として使えるかもしれない」

「……君は何をやっているんだろうね 中央の宮廷魔導師が見たら気絶するに違いないよ」

薬草の煮汁で紙を洗うのはいけないことなのだろうか。  
薬液塗布禁止令……は絶対に無いな。

「呆れられる理由がわからないんだが」

「世間知らずって罪だなあと思ってね」

イコはいつもと変わらずにここにしている。  
バカにしているのかと思う言葉を言ってくるが、表情は楽しそうだ。

「村以外だと周りの森しか見たこと無い俺はどうせ世間知らずだよ」

「ああ、機嫌を損ねちゃったかな　ボクに聞いてくれたら教えるから気にしなくてもいいのに」

俺が不貞腐れても変わらずにここにこしているのだ。  
彼女にとっては面白いことなのだろう。

「事前にいろいろと教えてくれよ　そしたら俺も覚えるから」

「君は知らないことが多すぎて、教えるのも大変なのさ　それに先に教えてしまうとボクがつまらないよ」

始めてみるモノに驚く俺を見たいらしい。  
意地の悪いやつである。

「いや、それでもだな……」

「それにね、頼られるって嬉しいことなんだよ？」

金色に輝く瞳に真っ直ぐ見つめられると、気恥ずかしくなる。

イコは恥ずかしいやつなのだ。

「教えてくれって頼んでいるのだけれど」

「ボクは説明が苦手なのさ 本物を見ればいいのに説明するなんて無駄な事はしたくないからね」

どうやら教えてくれないようだ。

実際に中央に行ったらいろいろと教えてもらうことになるだろう。

「ところで薬草を……大きな音と揺れだな」

「左隣の家の方からだね 見てこようよ」

阿婆擦れの家から音がした。

雨が降っているというのに迷惑なやつである。

「俺の家に落ちてこなくて良かった」

「そうだね この巨体だと家なんて簡単に潰されるから運がよかったのかもしれないよ」

住人がいない家で良かった。  
建っていた家は巨大な魔物に潰されて見るも無残な状態だ。

「初めて見る魔物だな」

「そうだろうね　龍なんてモノは地上で滅多に見れるもんじゃないよ」

この巨大な魔物は龍らしい。  
膨大な魔力は立っているだけでも吹き飛ばされそうだ。

「至る所に剣が刺さっていて、深い傷も負っている　羽根なんて片方もぎ取られているし　今にも死にそうだがどうなんだ」

「瀕死だろうと注意したほうがいいよ　できれば勇者以上の称号持ちが対応すべきなんだろうけどね」

勇者はすでに中央にいる。

こういうときに命を張るのが勇者だろう。

「国が呼んだ勇者様は物品と人手の補給を行い旅立ったとか間が悪い」



「どうせなら龍の命を盗んでいつてほしかったね」

身の上を明かさずにふらりと立ち寄った旅人を村人は優しく家に泊め、その旅人は旅立つときに人知れず災厄を呼び寄せる龍を倒し、村人が追いかけてお礼を渡そうとしても一宿一飯の恩義だと言って立ち去る……そして数か月後に気付くのだ、旅人は勇者だったことに。

みたいなことがあつたら間違いなく惚れる。

「無いな 夢すら見れないとか現実は厳しい」

「勇者だって人間だからね 人間に理想を抱くのは愚かな事さ」

根元は普通の人間と同じなのだから、どれだけ神格化しようとも性質は変わらない。

イコはそう言いたいのだろうか。

「居座られても困る 暴れられても困る 面倒だが討伐するか」

「国からの依頼だったら富も名声も権力も一度に手に入る出来事なのに 人知れず終わる龍殺しとか前代未聞だね」

放つといても死にそうだから放置しようかと相談したが却下された。自暴自棄になってブレスを撒き散らされたら村がホントに滅んでしまつらしい。

「俺がやるからイコは後ろで応援な」

「おや、手伝わなくてもいいのかな」

村長の力を試してみたいのだ。  
村を守る村長は無敵に違いない。

「村長は村と村人を守るのさ」

「うんうん、応援してるから頑張つてね　でも弱いのが来たら助けるからね」

イコがにこにこしながら後ろに下がる。

村人だろうと村長だろうと運次第なものには違いが無い。

「まあ、運次第だな　そういうのは神様に祈ってくれよ」

「ボクが神に祈るなんて、君のため以外は有り得ないんだからね」

イコは祈らなくてもいいのだけれどそれでも祈ってくれるのはなんとなく嬉しい。

出来れば神様クラスの仕様を引き寄せたいところである。

「『雨妖精・プウカ』が憑いたわけで」

「ボクの祈りを無視した神は滅んだほうがいいよ」

すごくイイ笑顔で危ないことを呟くイコを無視して龍に向かう。妖精で龍に勝てるのだろうか。

「妖精ステに降雨補正も入るがどうだろう」

「弱ってるし大丈夫だと思うよ……多分」

イコも推してくれてるし大丈夫だろう、多分。とりあえず薬草の煮汁を使えば死ぬことはない。

「もっとカツコよくて使い勝手のいいギフトが良かった」

「贅沢な話だね　神官が夢にまで見る憧れのギフトなのに」

そんな凄いギフトだったのか。

それでもマグの様に加速で無双してみたいのだ。

「俺の夢は加速を使うこと」

「神官の憧れを村長が持つなんて人生は儘ならないね」

そんなことを言っているイコはやはりここにこしているのである。  
雨が降っているのがそんなに嬉しいのだろうか。

「じゃあ、頑張ってくる」

「うん、頑張つてね」

血だらけの身体を引きずって威圧する龍を前にと危機感を覚えるが、イコに良い所を見せるために腹に力を入れる。  
そつえば龍って美味しいのだろうか。

地に臥す龍。

滴る水滴。

プウカさん無双。

「妖精だと侮ったらいけないな 予想を超越しててビビった」

「雨が降ってるからステータスに補正が付いてギフトで雷を落とす続けるとか昔憑いた雷帝みたいだったね」

ギフト『上縫』を発動し『雨妖精・プウカ』の憑依に成功した場合、プレイヤーはプウカとして判定され、ステータス・設定の一部【ギフト『雷迎』・物理耐性50%・魔法耐性50%・降雨時全ステータス150%上昇・スキル『避雷針』】を恩恵として貸し与えられる。

戦闘の終了とともにプレイヤーから恩恵が回収される。

「次からはプウカさんと呼ぶことにしよう 仲良くなればまた来てくれるかもしれない」

「そういうのは関係ないよ フィールドに発生している現象に関係している仕様が憑くって条件だし」

俺の思ってたことと違うらしい。  
なぜ本人よりもギフトのことに詳しいのだろうか。

「条件とかあったのか 楽しかったから雨が降ってたらまた来るってプウカさんも言ってたんだがな」

「妖精に意識があるなんて初めて知ったよ いや、神にも意識があるって知ったのは君が言ってたからだけど」

仕様に明確な意識があるということは知られていないらしく、俺にもよくわからない。

仕様と意思疎通が取れるのは俺くらいなのでイコにもわからないことが多く、実際は異なる情報もあるそうだ。

「妖精が憑いたのは数えるほどしかなかったが、無口というか意識が希薄だったから話せたのは今日が初めてだな」

「仕様の重要度で意識が変わるのかな そのところはわからないけど、雨が降ったらまたプウカが来るかもね」

やはりわからないことも多いようだ。  
とりあえず称号に依存してギフト発動はやめてほしい。

「『龍殺し』を得ただけだ」

「称号はソロかパーティで得られるモノだからね　今までは村人だったから何をしようとも得られなかったただだよ」

ジヨブが村人だと功績が村全体として取られるので称号を得ることは無かったが、村長として倒したので個人として認識されて取得できたらしい。

村人の扱いに泣いた。

「マジか　村長すげえな」

「村長が凄いというか、なんというか」

村長の偉大さに敬意を払いながら称号を『ヒノの後継者』から『龍殺し』に変えてみる。

恩恵の程は……。

「イコ！！　凄いぞ、この称号！！　『ヒノの後継者』とあまり変わらないが効果範囲が俺自身になってるから森から出てギフトを使えるに違いない！！」

「それは良かったね　というか『龍殺し』と補正があまり変わらな

「いつてホント？」

何を疑っているのか知らないが本当なのだ。

『ヒノの後継者』は陣地として登録されている村や周辺の森でしか補正が発揮しないが『龍殺し』は俺自身に常時発揮するという素敵な称号である。

「本当だ それにしてもこんなことなら称号を探しておけば良かった」

「『ヒノの後継者』を詳しく調べたほうがいいかも…… ああ、称号は常時発動型なんて珍しいから君が探したとしても見つかったのは条件発動型ばかりだったと思うよ」

称号を取得するのが難しいうえに発動条件もあるらしい。  
例えば皿洗い系統の称号があったとしたら俺は皿洗いし続けないとギフトの効力が発揮しない条件発動型ばかりだとか。

「それだと『龍殺し』は龍を相手にしないとダメなんじゃねえの」

「龍の経験値は魂のレベルを上げるから常時発動型の称号を得られる……らしい そこら辺はボクにもわからないね まあ、強大な敵を倒したご褒美みたいなモノじゃないかな」



村長がクワを片手に精霊を憑依させて龍を殺す。  
傍から見たら奇跡というか喜劇ではあったが大したことは無かった  
気がしないでもないがどうなのだろうか。

「村人ではなかったとして、俺が取得できそうな称号とかあったんだろうか」

「『常在戦場』しか思い浮かばないね 他にもあると思うけど最近  
は聞いてないから忘れちゃった」

称号『常在戦場』はひと月の間に敵の撃破数が一定数を超えると取得  
できるらしい。  
そんなことは無理であり、だからこそ『龍殺し』は嬉しい偶然だった。

「偶然でもありがたいことだけだな」

「廻り合わせかもしれないよ」

世界の仕様は必要なときに必然的に廻るそうだ。  
運命の歯車が噛み合うために。

「それは仕組まれてるってことなのか」

「いや、引き寄せているのさ」

夢を現実にするために。

足りないモノを補うように。

「俺が龍を倒したことも引き寄せられた結果ってことが 運命ってやつ」

「どうだろう 一つだけわかるとすれば、嫌な運命だね」

そう呟いたイコはいつも通りにこにこしながら、俺の隣で空から雨とともに人が降ってきているのを眺めていた。  
ああ、あの人の落下地点は俺の家じゃないか。

「運命を変えたくなくなった」

「不確定だから運命なのさ」

称号『龍殺し』を取得。

俺は村周辺から出たとしてもギフトが使えるようになった。  
空から雨とともに人が降ってきた。

「薬汁かけとけば大丈夫って言ってたし、塗りたくるしかねえな」

空から降ってきた人物に俺特性の薬汁を頭から爪先までたっぷりかける。

全身に傷を負っていたのでこれが正しい治療なのである……たぶん、おそらく、きっと。

「しかし……」

我が家に捨て身で突撃してきた人物を観察する。

イコほどの小柄な身体、艶のある黒髪を白い棒のような髪飾りで結っており、透き通るほどに白い肌は金色の汁まみれ。

「男、か？」

「女の子じゃないかな 詳しくは起きてからにしようよ ほら、持

つてきたよ」

龍に刺さっていた数本の剣と顔よりも大きな卵を肩に担いだイコが部屋に入ってきた。  
「なんの卵だろうか。」

「ありがとう でも重かったろ やっぱ俺が取りに行くほうが良かったんじゃないか？」

「ふふ、ボクが行ったほうが良かったんだよ あんまり重くなかったしそんなに気にされると困っちゃうよ」

イコが苦笑いするのを見て話を変えることにする。  
「困らせたいわけではないからだ。」

「それならいいんだがな ところでそれは何の卵なんだ？」

「これは龍の卵さ 凄く珍しいんだよ」

死んだ龍は転生して卵になり、新たな生として再誕するらしい。  
「とんでもない生物だ。」

「龍の卵か…… そいつが生まれた後に殺した相手に復讐するなら処

分するが」

「どうなんだろう 甦った龍は以前よりもステータスが伸びやすくなって、最終的には強くなるって聞いたし記憶や経験の一部を継承しているのかもしれないね」

取り扱いが難しいな。

かなり硬いうえに魔力障壁まで展開されるので卵を砕くにしても苦勞しそうだ。

「どうするか 卵の魔力が枯渇するまで攻撃するのは億劫だな」

「龍の魔力は膨大だからいつ無くなるかわからないよ とりあえず放つとけばいいんじゃないかな」

龍の卵は空気中の魔素を取り込んだり、他の生物の魔力を吸収して成長するらしい。

魔力を与えずに放置しておけば魔素しか取り込めず、孵るまでに時間がかかるだろうとのことだ。

「そうだな 放置が良さそうだ」

「生まれた直後なら殻が無い分、簡単に倒せるかもね」

いつ生まれるかは知らないが、その時の状況によって対応する。  
好戦的な残念だが再び卵へ戻ってもらうことになるだろう。

「捨てるのか売るとかじゃダメなのか」

「ボクは構わないけど生まれた龍は腹ペコだから周辺を喰らい尽くして滅ぼしてしまうから危ないね」

街一つくらいは簡単に崩壊するらしい。

その時に得た魔力で報復に来られても困る。

「村で暴れられるのも勘弁なんだがな」

「そんなに心配しなくても大丈夫だと思うけどね」

イコが大丈夫だと言うのだから大丈夫に違いない。  
とりあえず卵は放置に決定した。

「なんか注意点とかあったら教えてくれるか？」

「魔力を与えないことくらいだね」

生物が魔素を取り込んで加工されたモノが魔力と呼ばれている。  
この魔力を使って色々すると魔法が使えらしいが俺は魔法が使えないので詳しくはわからん。

「素手で触るのもダメそうだな」

「そうだね なるべく素手で触らないようにしたほうがいいよ 微量でも魔力が吸われるのを防げるからね」

どんな生物にも魔力があり、気づかない内に垂れ流していることもある。

龍の卵はそういった魔力も吸い取るのだ。

「布に包んで放置しておくか」

「やっておくよ ボクなら吸われる心配も無いからね」

イコなら魔力を分解して運べて安全なのでさつきも取りに行ってくれたのだろう。

ついでに俺特性の薬汁を与えたらすぐに生まれるから絶対に近付くとはダメらしい。

「厄介事も放置に決定したし、あとはこっちの寝てる人だな」

「ボクとしてはこっちのほうが悪介だと思うね」

俺も同感だ。

半殺し状態の龍とその後には傷だらけで降ってきた人……なんとなく関連性に気付くわけで。

「面倒な事ばかりだな　去年までは平和……でも無かったな」

「去年よりも大事になりそうだけどね」

また何かしらと死闘を繰り広げることになるのだろうか。

戦闘力の低い豊穰の神でも一応は神クラスのステータスであり、その恩恵を得た俺の腕を食い千切るような魔物と戦うのは遠慮したい。

「あんな化け物と戦うくらいなら薬汁で結界作って逃げるからな」

「あれは例外だと思うけど……でも何が起こるかわからないね」



過去に俺特性の薬汁を魔物に与えたらレベルアップしたという不幸に見舞われた。

他の人が作った濁った汁はダメージを与えるのに、俺の金色の汁は成長を促すとか理不尽である。

「アンデッドが即死だったから魔物もいけると思ったのにな」

「弱い魔物だったらエーテルに充てられて死んでただろうけどね」

千切れた腕すらも簡単に繋げる俺の薬汁は凄いのだが、強い魔物は取り込むので注意すべきってことらしい。

とりあえず龍には使わないようにしようと思う。

ここはヒノ村。

汁まみれの人が寝ていて、龍の卵がある小さな村。

そんな村で俺は数本の聖剣と魔剣を眺めている。

「聖剣ってあれだろ、勇者が持つてるやつ　魔剣は……知らんとりあえず伝説的な剣だろ？」

「そうだね　英雄が使っていた武器を聖剣、反英雄が使っていた武器を魔剣って感じに分類するのが普通かな　この剣からは『意思』が感じられないからレプリカだとは思うけど……でも、こんなに精巧なレプリカがあるとは思わなかったよ」

龍に刺さっていた剣の全てが聖剣・魔剣のレプリカであるというのがイコの意見である。

しかし、伝説的な剣のレプリカが何本も龍に刺さっていたなどという事があるのだろうか。

「昔の人々が龍殺しに使ったまま刺さってた、とか？　あと驚いてるみたいだけどそんなに似ているのか？」

「刺さっていた傷痕が新しかったから以前から刺さっていたっていうのは無いかな　剣については意思が無い以外は本物としか思えない」

いよ」

内包された魔力、蓄積された経験、神々しいまでの神秘、秘められた能力……。

どれもが本物と酷似していて、違うのは意思が無いという一点のみ。

「それはどうなんだ　普通によくあることなのか」

「有り得ない、としか言えないんだけどここにあるし……ホントに何なんだろうね」

レプリカと言えども本物に似ていれば、その分だけ能力を得るものらしいが最高でも一割ほどの性能を持つ剣を模造するのがやっとらしい。

聖剣・魔剣として在るために必要な『意思』が無く、それでも限りなく本物に近い偽物は有り得ないのだとイコは言う。

「有り得ないモノが有り得るってどんな状況だし」

「ボクもなんだかわからないよ　ここまで完璧だと清々しくすら感じるね」

剣を眺めているイコの横顔は形の整った眉を寄せて困った風だ。

俺は笑顔のほうが好きだが、困った顔や苦笑いのイコは何処と無く弱々しくて抱き締めたくなる。

「もしかして俺は得体の知れない何かを拾ってしまったのかもしれないな」

「そうだね 何処からどう見ても普通な要素が無いもんね」

抑えきれずに銀色の尻尾をもふもふしているのはイコが魅力的過ぎるせいだ。

何と無く気恥ずかしくなったので意識の半分以上を尻尾に向ける。

「厄介な事ばかりだ」

「それもまた廻り合わせかもしれないよ」

俺がもふもふしているのも廻り合わせかもしれない。

手のひらで撫でると抵抗なくサラサラとした心地の好い手触りを感じられ、軽く握って束にするとふわふわと柔らかくてほんのりと暖かいという至福の極みを見いだせるのでイコが癒しの頂点であるとわかる。

「素晴らしい、実に素晴らしい これが幸せってやつか」

「……ボクは恥ずかしいんだけどね」

少し赤くなってもじもじとしつつも尻尾は俺から離れることは無い。まさにご褒美であり、恥ずかしくて俺も顔が赤くなるうともふもふを続ける。

「……俺も恥ずかしいけどな」

「ふふ、君は難しいやつだね」

むしろこの程度の恥ずかしさで離れるなんて勿体無い。  
どんなに恥ずかしくてもイコの尻尾には正直で在りたいのだ。

「んっ……ん？」

「起きたな」

「起きたね」

寝ていた汁まみれの人物が目覚めたようである。

まだ寝惚けているのか開ききっていない瞳で周りを見渡している。

「……おはよう」

「ああ、おはよう　挨拶されたんだが？」

「おはよう　うん、好戦的では無さそうだね」

完全に目覚める前に村の外に捨てようかと思ったが、やめておいた。レベルは未知数だが龍のように半殺しにされるかもしれないからだ。

「……あなた方はどちらさん？」

「俺は村長だ　空から我が家に墜落してきたアンタを治療した」

「ボクは村人　これは龍から抜いてきたけど君の剣？」

金色の汁で全身ネトネトにしたのは治療のためであって、面倒だから塗りたくったとか無いから。

イコがにこにこしながら剣を差し出し、持ち主かどうか聞いている。

「あ、それ私の　ありがと……なんか全身ぬちゃぬちゃなんだけど」

「全身に傷を負ってたから薬草の汁をたっぷり塗ったせいだ　彼女に拭いてもらうといい」

「任せてよ　ああ、服は洗濯するんだけど洗っても大丈夫だよね？」

危険な人物では無さそうなので、代わりの服を机に置いてイコにこの場を任せて部屋を出る。

やはり持ち主らしいので、後程イコと相談することになるだろう。

「なんか似てるんだよね……」

何もかも違うのに彼女はどこか似ているのだ。  
村を訪れたあの勇者に。

「わからんな」

勇者とはそういうモノなのだろうか。

他の勇者を見ればどこが似ているのか気付けるのかもしれない。

龍の卵とか誰得。  
もふもふで幸せ。  
目覚めた汁人。

「うわっ、まだ髪がねちよねちよしてる……改めてありがと 私はアラマキ 普通に徹夜でネトゲしてたのに何故か勇者やってる 名前は取られたままだからアラマキと呼んで」

「アラマキ、ね 名前が取られたってのは？」

「奴隷に使われる傀儡の術式を勇者に転用してるんだよ 国は勇者を召喚した時に名前を奪って別の名前を植え付けるのさ ねとげは知らないけど響きの勇者の世界の何かじゃないかな」

勇者に反逆されたことがあったので首輪を付けるようになったらしい。

召喚直後に呪術で自由を奪い、『催眠』系統のスキルで名前の譲渡を許可させて、魔道具に封印する方法が取られているとか。

「アラマキはアルファの勇者に与えられる名前なんだけど未だに慣



れないのよね あ、ネットゲっていうのは……」

「ネットゲとやらの説明は要らん しかし、勇者も不便なんだな」

「アラマキの言い分から考えるとねとげは関係なさそうだもんね  
それで名前なんだけど過去に勇者が反逆したとき、真っ先に王族と  
貴族を殺し回ったらしいからね 操れない兵器ほど怖いモノは無い  
ってことさ」

勇者は物好きというか御人好しかと思っていたが撤回したほうが良  
さそうだ。

半強制を強いられているようで、自由意思もほとんどないかもしれ  
ない。

「魔王を倒したら自分の世界に帰れるって言われて我慢してたわけ  
で、魔王の居場所を教えてくれるって言われて話を聞いてたらな  
ぜか他国を侵略する作戦になって、断ったら王に命令されそうに  
なったから話せなくなるように魔法をぶち込んだ」

「それは……どうなんだ？ 勇者ってこんなものなのか？」

「そうだね 命令が発動する前に邪魔されると無効になるようだが  
ら命令権の分散や権力者への攻撃不可などが取り入れられるかもし  
れないね でも、アルファは他の国と情報のやり取りをしていない

し、態々自国の失態を知らせることもないだろうね　だから制限されるのは次のアルファの勇者のみってことになるかも」

イコは何を言っているんだ。

それとも俺がおかしいのだろうか。

「貴族が魔道具を持ってきてドヤ顔で「名前を返して欲しければ言うことを聞け」って言い出したから魔法でそいつごと粉碎した　カッとなってやった　反省はしていないし、後悔もしていない　出来るならもう一度したい」

「ダメだ、こいつおかしいぞ」

「名前を取られたことに屈しないその姿勢、凄くいいよ　権力を得た人間で馬鹿になるからもつと絶望を味合わせてやったほうが良かったかもしれないね　ボクも興味が湧いてきたよ」

おかしいのは俺なのか。

いつからおかしくなったのだろうか。

「名前を思い出せなくても元の世界に戻ってから誰かに教えてもらえるだろってアルファから飛び出すときに置き土産で魔法を国全土に降らせて、魔力流で地上まで行こうとしたら力ロンに襲われて羽根を切り取ったら落下しはじめてこれはヤバいと思って魔法でなん

とか墜落死を避けようと頑張ってたら羽根にぶつかって気絶して、  
ここで目覚めたってわけ」

「行き当たりばったりだな 空に浮いてる国から飛び出すとかさすが勇者、普通じゃない」

「確かに普通じゃ有り得ないね 龍と単独で戦えるなんて歴代の勇者でもそう多くないよ しかも最弱で有名なアラマキだなんて」

落ちてきた龍はカロンというらしいが名前なのか種族なのか俺にはわからない。

アラマキは勇者の中で最弱だったらしいが、龍を半殺しにするという偉業を果たしたとか……どうしてこうなった。

「私の素晴らしい才能を発揮したからに決まっているでしょ 天才は武器を選ばずなのよ」

「武器って使ったことないからわからんがなんとなく凄いつてわかる」

「いや、才能があるからって理由で龍が倒せたらほとんどの勇者が龍殺しだよ」

召喚された勇者は戦いに関しては天才的らしい。

勇者には資質がある者を召喚するからとか神にギフトとは別に才能を貰うからとか諸説ある。

「冗談だけど 実際は聖剣と相性が良かったからであって才能は…  
…称号は持ちまくってるからどうなんだ……まあ、私と聖剣マジパ  
ネえよってこと」

「相性が良かったらマジパネえよなのか 俺らもマジぱねえよだな」

「そうだね まじぱねえよだね」

俺とイコはマジパネえよだ。

目が合うだけで幸せ。

「なにこの空気、私だけ置いてきぼりなんだけど 聖剣の話をした  
だけなのに何故だし」

「聖剣とマジパネえよしてろよ」

「天才なら考えればわかるんじゃないかな」

にここにしているイコを見てほんわかしていると気持ちが満たされる。

ギフトで女神が憑依した場合、イコに違いないってくらい素晴らしいのだ。

「村長さんと村人さん辛辣なんだけど 勇者つてもっと尊敬されとかないの？ これじゃツラすぎるんだけど」

「他国の勇者とか排されるのが常だから 聖剣とアラマキの首があれば貴族になれるな」

「アルファを飛び出して来たんだよね？ 国の援護無しで孤立無援とかすごいよね」

とりあえず話が通じるらしいから話してるだけで、略奪とかしようものなら俺も交戦する意思があるわけで。  
勇者に悪感情しか無い現状で普通に接していることに感謝して欲しい。

「チートステータス持って異世界よりも家でネットゲしてたほうが幸せだったかもしれないという現実 何故だし」

「まあ、よくわからんが頑張れ 夢は見ないほうがいいぞ」

「気にしないほうがいいよ 現実なんてそんなものだからね」

村長と村人に励まされる勇者とか。

何故だして俺が言いたい。

「優しい言葉をかけられると切なくなるからやめて……優しくしつつ褒賞のために勇者狩りとかしないでしょ？ 助けてくれた親切な村長さんと村人さんと殺し合いとか鬱展開は無いでしょ？ 味方のいない私の拠点にする予定だから勘弁して、頼むから」

「いや、しないから 大剣を背負った勇者だったらどうにかして殺したいけどな」

「というかサラツと拠点にするって言ったね」

悲しいくらい必死なので否定してやるが拠点とか巻き込まれそうなのでどうか行ってくれないか。

大剣を背負った勇者は言わずもがな、形見を持っていった敵である。

「寂れた村だし誰も勇者がいるとは思わないでしょ ここが私の拠点に決定しました 覆りませーん ……」冗談は置いておいて大剣の勇者ってシンカイでしょ？」

「拠点も冗談だよな？」

「シンカイは隣国の勇者の名前だよ 勘違いしてない？」

そつえばあの勇者は名前を名乗っていなかった。

村で食料や装備を集めていたのは隣国の外周からここまで侵入して消耗したからでは無かるうか。

「勘違いじゃない 大剣の勇者なら絶対にシンカイだから テストからやり込んで、しかもアルファの記録まで暇潰しに暗記した私に間違いはない あと拠点は超本気だし」

「もしあの勇者がシンカイだとしたら手を出しても構わないんだよな？ 拠点とか外にしる 外周は広いから好きな場所に行け」

「まあ、隣国の勇者だからね 褒められることはあっても罪にはならないかと というかここは国に統治されてないから何が良くて何が悪いかわからないんだよね」

日々、神に祈ったご褒美かもしれない。

世界が俺にシンカイを殺れと囁いている気がする。

「外周って言った？ 外周とか嘘でしょ、村長さん 嘘って言うてよ なんてテストのラストイベント並みの場所に村が……村？ 村の名前を教えてください？ 私の今後に関わるからオネガイシマス」

「うるせえ、薬草でもかじってる なあイコ……」

「うん、アルの手紙にもあったけどシンカイは中央にいたらしいね 都合良く今もいるのならエーティルフィアに戻られる前にどうにかしないと」

シンカイが今も中央にいるとは思えないが何らかの理由で滞在しているのなら俺には絶好の機会。  
この先は廻り合わせ次第である。

「村長さんが言ってた金色の薬草がどう見ても霊薬なんだけど！？  
あと村人さんの名前っぽいのが聞こえたけど村長さんと村人さんの名前を教えてもらいたいんだけど！？ それから村の名前と、方角と、時系列から進行しているシナリオを確認して、あとは……」

「アラマキのくせにうるせえ 表出ろ」

「アラマキのくせに静かにしてよね」



興奮しているアラマキに罵声を浴びせる。  
一人で喋りすぎ。

「質問すら許されないのですか…… 最近の私ったら不運で不幸……」

「教えてやるからイジけんな 先に飯だ」

「そうだね ボクもお腹空いたよ」

アラマキの言葉を信じるのならばあの勇者はシンカイである。  
あとは俺に勇者とやり合う踏ん切りがつくかってところだ。

「とはいえ自信が無いんだよ…… 毒殺でも狙うべきか」

「不安なら他の手段を選んでね 無理はしないほうがいいよ」

どうしたものか。

返り討ちにされてイコに迷惑がかかることは避けたいところである。

「ふふ、ボクのこととは心配しなくても大丈夫だよ それともそんなに頼りないのかな」

「いや、そんなことはない 頼りっぱなしだ」

いつも一緒だった。

イコがいたから今の俺があるんだ。

「なら気にしないで好きなようにしたらいい 君に出来ないことなんて無い ボクが言うんだから間違いないよ」

「そうだな イコがそう言うのなら大丈夫だな」

にこにこ微笑んでいるイコは本当に綺麗だった。

見惚れていたが急に恥ずかしくなって窓に目を向けると、長く降り続いた雨が止んでいた。

「ご飯マダアー？（・・）っ／＼ チンチン」

「ちょっとアラマキぶち殺してくる」

「アラマキもシンカイと同じく勇者なんだけどね……」

なんかアラマキはぶちつと殺れそつな気がする。  
今日は久しぶりの青空だった。

アルファの勇者アラマキ 表出る。

エーティルフィアの勇者シンカイ 表出る。

イコ 女神超え余裕でした。

「で、卑しくも我が家の食卓についてるアラマキは何が聞きたいんだ？」

薬草のサラダを出したらアラマキがいきなり「それをたべるなんてとんでもない！」と叫んだので黙らせるために無理やり口に詰め込んだ。

金ぴかに輝いているのであまり美味しそうでは無いが一日の疲れが吹き飛ぶので食べている。

「うわぁ、私ってフル回復系のレアなアイテムって出し惜しみして結局ラスボス戦でも使わないのよね……それがサラダで出されるなんて……甘く見ていた……っ！！ 無意識にこの世界を見下してすらいた……っ！！ インベントリとかなぜか倉庫に繋がるし、とりあえず何枚か貰っておこう ドレッシングがかかってるけど……いや、戦闘中に美味しく回復できるってプラスであれどマイナスじゃないし しかも戦いながら霊薬を美味しそうに食べてる勇者って可愛くないね？」

この駄勇者はホントに人の話を聞かないやつだ。  
手に取った薬草が次々と消えるのは何かの魔法だろうか。

「魔法、でも無さそうだね ギフトにこんなのは無かったし……ス  
キルのかな 商人なら似たのがあるけど、でも違うよね なんだ  
ろっ……はい、もう一個あげるよ」

イコは勇者の消失魔法に興味津々だ。

次から次へと俺特製の薬草シリーズ（サラダ、汁、ジャム、キャン  
ディ）を渡しては消える様を嬉々として観察し、渡されているアラ  
マキも何故かノリノリである。

「ヤバい、マジヤバいわ これだけあれば流石に死ぬことなんて無  
いでしょ 不死身のアラマキさん伝説が明日から始まってしまっ  
た……え、なに？ なんか言った？」

「表出る、クソ勇者 伝説が始まる前に俺が人生を終わらせてやる  
よ」

「まあ、勇者は死なないんだけどね」

上位の仕様が憑いたときの鍬は地割れを起こすくらい簡単なのだ。  
アラマキの頭なんてそこらの魔物と同じように薬草を磨り潰す感覚

で潰せるに違いない。

「うわっ、悪寒でぶるつと……　じ、冗談だつてば　村長さんは怖いなあ……　ほらいコさんを見習つたらどう？」

「アラマキごときが名前を呼ばないでよね　今代の勇者の中で最も早くこの世界とお別れすることになるよ？」

アラマキに渡す直前だったジャムが容器ごと砂のようになり、サラサラと机に小さく積もる。

にこにこと微笑んでいるイコを見たままアラマキの顔色は青ざめている。

「で、聞きたいことってのはなんだ？」

「まさか忘れたとか言わないよね？」

「ひあっ！　いや、あの、それは……聞きたいことは、えっと……名前……そう、名前が聞きた……あ、まさか名前を聞いて死んだりとかな？　無いでしょ！？　無いでしょ！？　名前聞いたら死亡とかそんな無理ゲーじゃないよね？　死んで覚えるとかじゃないよね？　ネトゲ世界で私だけ死ゲーじゃないよね？　他の勇者みたいに冒険していいんだよね？　お願い、神さま……テスト前にしか祈らないし、家は仏教だけど私を助けて……あれ、でも勇者って神様

が誕生に關与してない存在とかそんな設定が……いやいや友好的な神様もいるから助けてくれるはず たぶん、おそらく、きつと……ダメかもしれない……」

「名前聞くだけでそんな必死になられても困る」

「泥人形たちの欲望が神に祈るとか哀しいモノを見てしまった気分だよ 不運や不幸な勇者は数あれど、歴代で最も可哀想な勇者はアラマキかもしれないね」

イコが言っている泥人形とはヒトを示しているらしく、最近ではあまり言わなくなったがそれでも時々泥人形と呼んでいることがある。

俺やイコは泥人形では無いそうだ。

「で、名前だっけか 教えてもいいぞ」

「ほ、本当!？」

「ただし聞いたら死ぬけどね」

エリエリレマサバクタニとか言いながらアラマキが崩れ落ちた。薬草をもしかもしゃして見守る。

「ちなみに『神よ、何故私を見捨てたのですか』って意味で私が持つてる剣の一つに銘もあるわけで」

「おまえ余裕あるだろ」

「それを持つてゐるってことはアラマキは神に見捨てられるってことじゃないの？」

立ち上がってすぐに飯を食べ始めるアラマキを白い目で見るが気にせずにはパクついている。  
が、イコの言葉に焦りだした。

「え、いやまさか無いでしょ？　そういうの関係ない、はず……だし？　あるえー？　いや、でもギフトあるから一応神さまも私に目をかけてくれたわけで　それともゲームとは違うとか？　無い無い……でも見離されてた場合はヤバいし　うわあ、やっぱり無理ゲーかもしれない……でも生きてるし大丈夫、と考えるとやってられない」

「なんか悩んでるみたいだな」

「色々あるんだろうね　でも勇者については記録があんまりないか



らわからないことばかりだよ 脅威になったことも無いからほとんど調べてないし、ここにずっといるから最近のことはサッパリだし」

調査に特化したイコの同胞が色々と情報を集めているが勇者についてはあまり調べていないらしい。

資源のある土地の奪い合いや戦争でいつも勇者同士が殺し合うので調べる必要性は皆無だったからとか。

「でも村長さんの近くにいれるって事は神さまも黙認してるって事だし案外大丈夫だったり……とか思わせて鬱展開も有り得る うわあ……どうしよう、うわあ とりあえず交戦前らしいってことしかわからないし聞いてからじゃないと 腹をくくるしかないね、展開的に考えて シナリオのラスボスを二人でやってたようなぶっ飛んでる村長さんと村人さんだし非常識を乗り越えるくらいの気概で頑張るのよ、私 女は度胸で貧乳はステ、毒を食べたらおかわりして三杯目をそつと出す、やらないより殺られて真実を知る、ってくらいで逝くしかない！！ さあ、私を殺して！！ あ、出来れば優しくお願いします」

「いや、決意を固められても意味わからんし」

「うん、頭おかしいよね カチ割って薬草入れてあげたらいいかも」

グツと両手を握り締めてさあ早く、なんて言われてもどうしろと。あと髪の毛が薬汁で金ぴかのままだがいいのだろうか。

「え？ 私が死んだら名前を教えてもらえるんでしょう？ だから一息で殺っちゃってください 出来れば村長さんが良いです 村人さんが殺ったらマジでヤベーです 私よりレベル高い人が砂みたいないエフェクトを残して即死したのをこの場で再現されても困るので村長さんに優しく殺ってもらったほうが安心 攻撃された瞬間に霊薬呑むけどいいでしょ？ その一死で勘弁して 土下座するんで 全力でゲザるのでお願いします」

「いや、殺さないから 冗談だからな」

「うん、冗談でもいいよ 勇者って殺すの大変らしいし」

喜んでいるアラマキがうるさいので薬草を口に詰め込んで黙らせる。イコが食べてるんだからゆっくり眺めさせる。

「死ぬ決意までした食事でレベルアップしてしまった……何故だしまさか私の決死の覚悟が生存本能により云々とかなんとかは絶対に有り得ないですね、すみません」

「薬草……が使われてて有り得ないほどのエーテルで構成されてるからね、この料理 高位の魔物を倒して経験値を稼ぐよりも割はいんだけど高純度すぎて弱かったら耐えられなくて死んでたよ 龍とも戦えるし、普通に食べられるし、アラマキはかなり高レベルだ

ね」

エーテルとは魂を構成する基礎であり、吸収することによって存在の格が上がるのだとか。

格をレベル、他の生物のエーテルを吸収することを経験値を稼ぐなどが冒険者の用語であるらしい。

「最後の晩餐になるところだった　自然な不意打ち……っ！！　油断しなくとも死にかける……っ！！　死亡フラグが多すぎていつの間にか折れてるを実践してる気分です」

「煮汁やジャムなんて更にエーテルを搾って結晶化させたような代物だからね　自信が無かったら口に入れないほうがいいよ　ほとんど賢者の石の一種だし」

エーテルは神様を構成しているうえに好物のようなものなのでギフトを使うと持っていかれるが収穫期に薬草を捧げると持っていかに憑いてくれるし、汁やジャムなどに加工すると喜ばれる。

薬草は一年中摂れるので持っていかれることなんてほとんど無いが。

「蘇生アイテムが存在しているとは……うわぁ、この煮汁のアイテム名が『エリクシル』だし　飴は『第五実体』、ジャムなんて『大エリクシル』　完全に賢者の石です、気軽に呑んだら不死になってしまうわ……村長さんて錬金術師なの？　私の現実が崩壊寸前です」

「まあ、第五元素のエーテルで構成された霊薬で作ったモノならそうなるよね　今は調味料にまで入れてるし　普通は煮詰めることすら出来ないけど、それすらも乗り越えて母のために物心ついたばかりの少年が作ったところが凄いよ　ちなみに死亡直後なら蘇生できるし、不死とはいかないが魂の劣化は抑えられるよ　台所にある食材のほとんどは霊薬が入ってるかな」

整った眉とつり目がちで少しキツイ印象を与える金色の瞳に宿る慈愛はさながら地母神のようであり、瑞々しいぷるんとした小さな唇が色気を感じさせ、つやのある形の良い鼻と透き通った白い肌が全体のバランスを調え美しさの中に可愛らしさを感じることができ、背中を流れるようなさらさらの長い銀髪、そして狐耳と九つの尾が光を反射して淡く輝き、一思いに抱き締めてしまいたくなる愛らしさとそっと消えてしまうのでは無いかと思えるほどの繊細さのアクセントになっていて、村や国・世界で一番だとかそんな小さいことに拘っているのがバカに思え、イコを唯一の美として讃えたいくなる。

「なんかこの家が怖くなってきた　霊薬の栽培してるし死者蘇生とか企んでいるんじゃない……」

「アラマキは解るのにシンカイは気付かなかった　同じ世界から来てるはずなのに違いがあるのかな　栽培というか使徒が神のために……　ああ、そうか　ヒノって何だったか忘れてたよ……　それで死者蘇生は試したら失敗、別の何かになってね　飴を魂とした魔物になっちゃったんだよ」

キツネ型も可愛いし、ヒト型も綺麗だ。  
どちらも良いので迷ってしまう。

「（。。（）アーアーきこえない 話が地雷ばつかでお腹いっぱいです …… 村長さんが村人さんを見つめたまま固まってるけど 幸せそうだよね」

「ふふ、そうだね 苦労は人知れず、努力は人一倍 それでも笑っていてくれるのが嬉しいよ」

イコは昔から変わらずに綺麗だ。  
だが俺は変わっている、変わってしまう。

「話も逸れすぎたし、お開きにしようか そっちの奥の部屋が空いてるから好きに使ってね」

「ああ、はい じゃあありがたく借りるね 村人さんはどうするの？」

このままではイコを置いて先に行ってしまう。  
いや、置いて行かれるのが……一人になるのが怖いのだ。

「ここにいるよ 彼は何時も能天気なのにボクのことに変に悩むからね」

「ふうん？」

何か無いものか。

イコの隣にいるのが、難しい。

「自分のことは何も悩まないのにね」

「確かに 霊薬を薬草って言ったり、料理して賢者の石シリーズを作るとか自由すぎる 全てに関して隙と死角だらけなのに勝てる要素が無い気がする」

望むことは叶えられる。  
イコが言っていた。

「今日の内にどうしても聞きたいなら夜に村の中心に行けばいいよ  
ボクは寝てるけど、彼は起きてるから」

「うーむ、どうしようかな……」

全ては廻り合わせだ。

引き寄せることも、もしかしたら……。

「好きにしなよ」

「うん、好きにしますとも 桃色空間で死にたくなっ  
たし部屋に行  
くわ …… ああ、妬ましい」

うひゃー、イコさんマジ女神。

微笑まれると爆発しそうになる。

アラマキは薬草が好きなようです。

村人は微笑んでいるようです。

村長は幸せですが悩み事もあるようです。

雨が止み、空が晴れた。

明日には川が現れるだろう。

「アラマキ……髪は洗ったか？」

そんな日の夜には雪が降る。

白い雪がヒノに。

「魔法でバシッとやった 加減がわからなくて頭を吹き飛ばすところだったけど、私は元気です あと部屋の屋根が龍の羽根なのは私への当て付けとかならマジ勘弁してくださいよ」

黒髪を頭の後ろ辺りで結い上げたアラマキがとことこと近寄り、俺の横に腰を下ろす。

服を着替えた姿はイコと同一年くらいの少女に見える。



「羽根とか忘れてた …… しかし、女だったんだな」

「女の子の一人旅は危ないかと それで男装しようと城にいる執事見習いの人の服をパクって着たわけで 貴族のヒラヒラは嫌だし、街に出られないから普通の格好がわからないしで世話係にもいた執事に目をつけたのさ」

キラッとかなんかム力ついたが俺は大人なので流すことにする。  
旅するのに執事服を選ぶとかよくわからんがアラマキなので仕方ないだろう。

「そうか まあ、あれだ 龍や剣が無かったら外に放り出してたなあと挨拶と勇者の名乗りが無くても外に放り出してたかもな」

「死亡フラグが多いぜ！！ もう諦めた 乱立してるのは無視して超頑張つてへし折る そして過去の私ぐっじよぶ！！ 寝起きでテキトーだったけどぐっじよぶ！！」

仕立ての良い服だが地味なので許したが、もし貴族っぽい服だったら村の外に放り出して死んでもらったところだ。

やんごとなき身分の方々とやらは面倒だしイコも嫌いなので勝手に死んでもらったほうがいいのだ。

「ああ、剣と言えばイコが気になっていたな 有り得ない精度のレプリカだって」

「村長さんは興味があつたりする？ …… 奪つたりする？」

無いな。

全く興味無いし、欲しく無い。

「いや、全然 イコが楽しそうだったから何となく、な イコも自分で答えを出すのが好きだし直接的な事は聞かないだろうな」

「いやいや、予想と全然違うような それでいて、二人らしいと感じてしまうような テキストだけじゃわからないものだわ、こういうのって」

イコが楽しいなら俺も楽しい。

アラマキはバカっぽいが悪いやつでは無さそうなので無理やり調べる必要も無いだろう。

「俺が興味あるのはアラマキのことだな かなり知りたいことがある」

「まさか村人さんを差し置いて恋愛ルートに突入！？ 私の魅力が

引き起こした悲劇！？ 中性的で小柄な男だと思っていたが、実は可憐な少女だと知って抑えきれない想いが原因でフラグ建設しちゃうたり！？ 私ったら可愛くて罪作りな女でごめんね！！」

食前の手洗いや食器の使い方などアラマキの細かな仕種から一定の水準以上の教育が見て取れる。

勇者がいる元の世界も気になるが、それ以上に俺の興味を引くモノがある。

「アラマキの言葉はよくわからんのも多いが俺とイコの事を以前から知っているような、そんな言動が節々から感じられる おまえは何を知っているんだ？」

「スルーされたし甘酸っぱい恋愛は無しだし……じゃなくてそれはですね、あのですね …… やっぱり説明したほうが宜しいですかね？」

アラマキと俺たちの接点は無いはずだ。

それなのに見知った風な様子が気になるのは当然だろう。

「そうだな まあ、虚偽でもいいがな」

「私は義理堅いと自負してまして そんなわけで助けてもらっておいて嘘はつかないわけで」

「私だって真面目なときは真面目なのですよ、きりっ」などと澄ました顔がムカついた。  
真剣な顔なのにやたらと胡散臭い気がするが、可哀想なので指摘はしないことにする。

「ちょっと長くなりますけど構わないでしょ？　でしょ？」

「却下　おまえは話が長いから簡潔にしろ」

アラマキは一言がやたらと長いし、話がよく逸れる。あの勇者とはかなり違うようだ。

「なん……だと……　なるべく省くんで勘弁して欲しいわけで　話す前に村長さんの名前と村人さんの名前を教えてもらえるとありがたいかなあ、と」

「ああ、そういえば聞きたそうにしていたな　俺の名前はヒジリ、見ての通り人間でヒノ村の村長　で、食事のときにも一緒にいた少女がフォックステイルのイコ　唯一の村人だ」

イコの見た目は獣人の狐族なのだ。  
ヒト型も綺麗だが獣型の彼女は胴と足がスラリと細長く、銀色に輝

いていて美しい。

「唯一？ ヒノ村は廃村のはず…… ああ、もしかしてこれが占拠なのかな…… ええと、勇者と戦ったとかは？」

「無いな 勇者に興味も無かったが折り合いが付かなかつたら戦う機会があるかもな」

イコも好きにしろと言ってくれたが話し合いで解決できそうなら交渉したほうがいいと思う。  
無理そうならパーティーを毒殺して不意打ちで優勢に持ち込んで戦闘の流れでいくかもしれない。

「ううむ、 テストのラスト直前って感じかな…… まあ、いいや  
アルファの勇者・アラマキが村長さんにご説明しましょう！！  
…… あ、でもアルファから逃亡してるしアルファの勇者（ ）じゃね？  
というかアルファの勇者とかチョー嫌なんですけどー」

「おい、逸れてんぞ しかも思考が漏れてることも多いし 嫌なら  
ヒノの勇者とか名乗ってろ」

語句の多さと逸れる話、駄々漏れの思考はコイツの話術か何かかと疑いたくなる。

ヒノの勇者とか弱そうだな…… いや、ヒノに悪いか。

「称号が『ヒノの勇者』に書き換わるとか神さまがリアルタイムすぎて流石村長さんというべきか、むしろ通り過ぎて怖い いや、村長さんも睨まないで下さいよ ちゃんと話すんで あれですよ、考えることが多すぎて口に出さないと纏まらないというか あとは久しぶりに話せるから嬉しくなって饒舌になっちゃうのと生来のモノです 赦せ、村長!!」

「はいはい、わかったから話を進めろよな」

アルファでは軟禁状態で息の詰まる思いだったらしい。

好きなように喋らせてやろうとも思うが話が逸れるのはダメだ。

「申し訳ないです とりあえず勇者というのは異世界から召喚されるわけで その召喚先の世界でネトゲ……ええと、物語を舞台にした箱庭を共有して複数人で擬似的に生活を体験できるのですよ つまり世界を作って第二の人生的な ここまではok?」

「何となく」

勇者の世界では遊ぶための世界を作り出せるという創造神クラスのことが出るらしい。

何のことかわからないが関連性があるのだろう。

「その物語が関係するんだけどね 私がやってた物語がこの世界によく似ている世界だったわけで」

「え、まさか私が創ったとか言い出す展開？ だったら自殺するわ」

こんなやつが創った世界とか嫌すぎる。

でもイコを残すのは嫌なのでアラマキを殺すことにする。

「ちょ、なんか殺気がヤバい 村長さんの勘違いで私がヤバい そんなこと言わないから落ち着いて……そのクワをゆっくり下ろすんだ 殺人なんて虚しいことはやめたまえよ」

「冗談だ アラマキにそんなことが出来るわけがない」

鍬をしまう。

ホントだったら全力だったか。

「マジで死亡フラグが多すぎる…… 地面に落ちたクワが消えたとか気にならないレベル 決して地雷は踏まない もう話を進めてもいいでしょ？ 私は死にたくないのよ……」

「カッコつけた話し方するからだ」

要点だけで話してもらいたい。  
何なら百文字以内とか。

「なんと辛辣なことか…… もうパツと話しますけどその世界に村長さんと村人さんがいて物語の最後の敵として立ち塞がったので七国の勇者と私のように物語に参加していた人に倒されたってことです」

「え、アラマキが俺を討伐？ 表出る」

もう表ですよ、ならば死ね、おのれ裏切ったな、冗談だ、はははこやつめ、などと適当な言葉の応酬。  
作られた物語に似ている世界で敵だった人物に助けられるとはどんな気分なのだろうか。

「私は倒していないけどね つまるところ、物語のシナリオと比べていたというか 進行を確認していたというか」

「で、どうだった？」

俺が問い掛けているのは世界が似ているかどうかだろうか。  
それともシナリオとやらの進行だろうか、自分でも曖昧だ。



「世界はそのまんまっぽいのにアルファの勇者が私だった時点でな  
んとも シナリオも微妙 何故なら私がいるから」

「自分が乱してたら世話ねえな」

ダメだこいつ。

早くなんとかしないと。

「似た世界は似てるだけなんでそれくらいがちょうどいいかなと  
シナリオを盲信すると突然ズレが生じたときに焦りますからね 村  
長さんが興味あるなら始まりから終わりまで詳しく話しても良いで  
すよ？」

「いや、いらんな 興味ない」

似ているだけで本物とは違うのだから知る意味は無いだろう。  
知って何になるというのだ。

「そうでしょうね 知りたがる村長さんとか想像がつかないし 実  
はもつと魔王みたいな人だと思ってたのに普通に微妙な気分になっ  
たわけで 村長の一撃、プレイヤーは死ぬって感じで」

「いや、よくわからんが 魔王みたいになってどんなだし」

アラマキの知っている俺は群がる超上級の冒険者を一撃で蹴散らし、勇者を優先的に殺しまくっていたとか。  
なにそれこわい。

「デスペナ祭りとか運営マジ鬼畜 報酬は陣地と称号だけど結局は倒した人の総取りだから損失でかすぎだし というか片側を放っておいたらフル回復する理由がコレとは……」

「おい、薬草を勝手にむしるな」

忌々しそうに薬草をむしるアラマキ。  
次々と手に取るので頭を小突いて止める。

「あいたつ…… こんなにあるんだからいいじゃないですか ケチだなあ」

「そこにあるから貰っていいっていう勇者の考えはやめる そういえば聞きたいことがあるって言うてたが何だったんだ？」

勇者は欲しいモノを自分の物にする手癖の悪さがあるから気を付け

ないといけない。

あんなに必死だったのだから重要なことだろうか。

「いや、もういいんで 色々と考えて生きようと思ったけど自分がいるだけでズレるとかどうでもよくなってしまうわけで」

「そうか」

金色の薬草に積もる雪を見るのが俺は好きなのだ。  
月明かりに照らされた雪が輝く風景は幻想的である。

アラマキは女の子。  
静かに雪が降る。

「ええと、聞きたいことが思い付いたわけで 私の知ってる村長さんは村の中と周辺しか行動できなかったんですけど村長さんもそうなのですかね」

「いや、出ようと思えば出れるけどギフトが発動しないからな ギフトの使用には称号が必要だから活動範囲も狭まるってことだ」

俺の『上縫』は仕様という世界に存在する知覚出来ない超常を自分に憑依させる強力なギフトだが、薬草や薬汁を捧げないと経験値やレベルを持っていかれるうえに戦闘でしか発揮しないので手軽に使うことが出来ない。

俺がヒノに住んでいなかったら発動しない無駄ギフトかと思うと恐ろしい。

「じゃあ村長さんの家から何か盗んだら外周を走り抜ければ逃げ切れるんですね！？ 機嫌損ねたらとんずらしてでも生き延びる！！ 私ったら素敵で狡猾でゴメンね！！」

「今は『龍殺し』の称号を得たから地の果てまで追い掛ける」

憑依したときは攻撃レンジが称号の範囲に限定されていたが『龍殺し』に換えることで解放される。

俺は何処にいようと……もちろん迷宮に入っただとしてもギフトを発動できるようになった。

「（＾ｏ＾）oh・・・まあ、そうならないように気を付けることにします 範囲が限定されてるギフトであつちでもこつちでも初めて見ますよ 勇者の私ですらもつと使いやすいわけで」

「だよな 『加速』とかならもつと手軽だったろうし」

『加速』は羨ましい。

『加速：壺式』で発動し、式式、参式と数字が増えることで速度が上がるらしい。

「称号の効果が発揮するのにも範囲があるんですよ？ なんか意味があるわけですかね」

「あるんじゃないの 考えたことないけど 範囲の起点はこれだけだな」

称号『ヒノの後継者』はヒノの生活圏で発動するのだ。  
発動限界はヒノの散歩コース（遠）である。

「これ……っという座っている綺麗な岩、というか石が？」

「ああ、俺が座ってるのがヒノ　おまえのがシラユキの墓だ」

座るのにちょうどいい黒い石がヒノの墓、白い石がシラユキの墓である。

『ヒノの後継者』は薬草を神に捧げる役割であり、ついでに墓守りもしているのだ。

「ひあっ！！　なんて所に座ってるんですか！！　失礼極まりないわけで！！　悪気は無かったんで許してください！！」

「そんな大袈裟な」

石に凄まじい勢いで謝っているアラマキを冷やかに見詰めてやる。  
気にすることでも無いだろう。

「いやいやいやいや、何を言ってるんですか　天罰、というか神罰下るでしょ　どう考えても　死にたくないのにフラグばっか立つん

だもん、死にたい……」

「なんか矛盾してるぞ 罰当たりな事なのか 俺の父さんと母さんはよく座ってたし、俺とイコも星を見るときはよく座るんだがなじいさんもあさんと座って話してたって言ってたし普通だろ」

腰掛けてくださいと言ってるとような形だし。

他の村人が座ったら翌日に死んだこともあったが俺に害は無いので大丈夫だろう。

「え、まさか神罰の前に村人さんに殺される予感……っ！！ これ  
が神罰とでも言うのか、神よ！！」

「忙しないやつだな」

ヒノとシラユキは互いを傷付けることのない深い信頼で繋がっていたというし、俺もイコとそんな関係で在りたいものだ。

というか天罰云々なら形見の剣を取り返さないとダメな気がする。

「なんという涼しい顔……ヒノの村長は格が違った……っ！！ 村  
長さんに涼しい顔とか言っというて何ですけど私が寒くなってきたわけ  
で」

「格ならそんな高くないがな 寒いなら部屋に戻れよ」

ギフト無しで村周辺の魔物と戦闘したら苦戦するくらい微妙なレベルだ。

迷宮に潜るパーティに誘われたとしても断るのは当たり前だろう。

「まだここにいます こんな私の世界じゃ滅多に見られないからね 貴重ってレベルじゃねえぞってくらいヤベーですよ、というくらい勿体ないわけで」

「そうか まあ、好きにしろよ 上着は貸してやるから」

夜は冷えるし、雪も降っているので女の子にはツライだろう。

サイズはでかすぎるだろうが無いよりはマシってことで我慢しろ。

「デレた！？ ツンデレだったんですね！？ あんなに厳しかった村長さんが見せた優しさ……私、きゅんきゅんきました 飴と鞭のコンビネーションの偉大さを知ってしまった……っ！！ 恐ろしい、畏……っ！！ どうせ風当たりが強い言葉が来るとわかっていても甘えなくなる……っ！！ 惚れた、だから財産ください 全部いいです 料理のレシピも欲しいわけで でも私から情熱的に押し掛けてラヴっても村人さんに抹殺されそうなので告白してもいいのよ？」



「そうか死ね」

「死の宣告!？」

きゃーきゃー言い出すから何かと思って聞いた俺が馬鹿だった。  
むしろアラマキが安定した馬鹿っぷりを発揮したというのだろうか。

「ふざけただけじゃないですか 冗談にしても死ねは酷すぎると思  
うわけで」

「すまない 心の底からだった」

「辛辣すぎるよ…… もつと私に優しさをください…… 私だって  
幸せになりたいわけで」

地面に座り込んでイジけたしたので言い過ぎたかと近付くと次々と  
薬草を盗むアラマキの姿が……。  
おいやめろ。

「殴るぞ」

「もう殴られたわけで……」

今のは頭を小突いただけだ。  
次はギフトを憑けて全力でかち割る。

「ホントに手癖悪いやつだな……」

「目の前に命が一つ落ちているとするでしょ？ そしたらどうする？ もちろん、私なら拾う 水が流れ出したら止まらないのと同じ欲望も止まらないでしょ 我慢もそう つまり私は悪くない 悪るのが悪いわけで だからください いっぱいでいいよ」

「ぶち殺すぞ」

流れ出す前にどうにかしろ。

原因を根絶するために息の根を止めてくれってことだろうか。

「すみませんでした もうしないので許してください 臨戦体勢とか怖すぎるわけで メラメラめっちゃ熱いんでマジ許してください ちょ、やべえって マジやべえって 助けてHelp me!!」

「炎帝が憑いたのに勿体無いな」

一撃必殺すら狙える強さである。  
実に勿体無い。

「今のはヤバかったわけで」

「おまえが悪い　ああ、今ので聞きたいことを思い付いた」

何と無く思い付いた。

せつかなので聞いてみることにしようか。

「なんですかね　まさかどんな死に方がいいかとかだったら天寿を全うしてポツクリと言いたいですけど死にたくないの今までの若さを保ったまま永遠の命が欲しいわけで　つまるところ無茶なフリはやめたまえよってことです」

「俗っぽいやつだ……　俺の中での勇者像が変わりまくっている  
そう身構えるなよ　聞きたいのは俺らが勇者や冒険者に討伐される  
って言うってたよな」

七国の勇者と冒険者が投入されるとかどんな状況だし。  
過大評価にも程がある。

「詳しく聞きたくなったとか？　仕方ないですから教えて差し上げ

てもよろしくつてよ？」

「いらん　なんだその口調、気持ち悪いな　侵攻が始まったらどっちに味方する？」

似合わない口調だ。

滑稽を通り越して可哀想ですらある。

「気持ち悪い……　プレイヤー側って言いたいところですけど、ヒノに付いてあげますよ」

「ふうん　でも死にたくないんだろ　向こうのほうが良くないか？」

全体の人数は知らないが向こうのほうが多数なのは明らかだろう。それに勇者もいる、有利にしか見えないが。

「言ったじゃないですか、私は義理堅いんですよ　しかも拠点をごに決めたのに攻められてヒノの勇者が黙ってるわけにいかないでしょ？　それでも勇者なわけで　私がいるだけでかなり違いますよ　というか私が加わったら圧勝ですね　勝ち馬に乗るのも大事なんです　数の利で調子に乗っていた勇者たちが倒れている前で私が元気に「ごめんね、強すぎちゃって」とかやってみたいわけで　優越感ハンパないですね　こういうのってありでしょ？　なんかイベントが起きて欲しくなりました」

「なんか邪だな…… まあ、いいか」

アラマキっぽいというのだろうか。  
下手な言葉よりはしっくりくるので及第点としてやろう。

「え、これって……」

「村を拠点にするんだろ よろしくな」

村長としてアラマキを村人に登録する。  
アラマキのジョブに村人が加わったらことになる。

「よろしくです!! 誠心誠意がんばります!!」

「村人を、か……?」

アラマキが新しい村人として加わった。  
イコを拾ったあの時と同じ、雪の降る夜だった。

「ついでに愛の告白をしてくれてもいいのよ?」

「ぶち殺す」

「勇者殺しの宣言されてしまったわけで」

ただの馬鹿だ。

馬鹿にしか見えない。

ゆきふるよる に アラムキ が むらびと になつたぞ ！！

「アラムキが村人になつたぞ」

俺の朝は早い。  
昔から変わらない。

「いいんじゃないかな 称号が『勇者』でジョブが村人っていう間の抜けた感じがアラムキっぽいし」

イコの朝は早い。  
昔から変わらない。

「勇者って全員あんな感じなのか」

「どつだろつね」

村を囲むように煮汁を撒くのが朝の日課である。

こうすることで薬草の畑を魂とした巨大な魔物に見立てることができている、らしい。

「朝飯は魔物の肉でいいか」

「うん、いいと思うよ パンに挟んだら美味しいんじゃないかな」

魔物に見立てた村に襲いかかってくる魔物がときどきいる。

力量を測れない馬鹿はそのうち野垂れ死ぬだろうし俺に喰われたほうが幸せだろう。

「ギフトすら不要」

「いつ見ても惚れ惚れする一撃だね 首と胴が綺麗に別れたよ」

鍬は非常に便利だ。

鉄製の刃・木製の風呂・木製の柄から成っていて、俺は畑仕事をこれ一つで行っているし、首を刈り取るのに都合のいい形もしている。

「小型なら首刈りするだけだし楽なんだがな」

「文字通り朝飯前だもんね」



『首刈り』は攻撃が頸部に当たると確実にクリティカル判定になる  
お手軽スキルだ。

魔物の首を鋏で狙い続け、一撃で刈り取れるようになってもひたすら狙い続けていたら修得したスキルであり、大型の魔物などにも発動するのでギフトを使わないときは重宝している。

「村人から村長になつたら称号が増えまくるんだが 今なんて『竜殺し』だし 料理してたら『フラメル的心思』と錬金術師のジョブが、龍の死骸を見てたら『ファウストの再来』まで手に入る始末バグったのか？」

「バグってないよ 今まで取得しなかったモノを一度に取得してるからそうなるだけだね 『竜殺し』は朝ご飯にするその魔物が低級の竜だったからだよ」

こんなに弱いのに竜だったらしい、初めて知った。  
マグも余裕で屠ってたし、竜って弱いんだろうか。

「ふうん？ まあいいか 今日ほ畑広げるぞ ちょうど壊れた家と焼けた家があるし」

「うん、頑張つてね」

イコがいるだけで十分なのに応援までされてしまった。  
今日は休憩いらすの予感がする。

「頑張るからな、イコのために」

「ふふ、照れちゃうよ」

朝から幸せだ。  
もう時間が止まればいいのに。

「ちょっと私を無視して桃色空間を形成するのはやめたまえよ!!」

「いたのかよ」

「いたんだね」

軽装に身を包んだアラマキが巨大な黒い大剣を肩に乗せて立っていた。  
た。

息が荒く、肩が上下しており、汗も流れている。

「なにそれひどい 私の獲物を横取りしておいてその反応は鬼畜で

しょ　しかもクワで一撃とかふざけてるんですか　経験値の横取りは嫌われるわけで　し過ぎるとスレに晒されても知りませんよ　だから早く私に謝るべき」

「知らん　朝早くから何してるんだ　つつか剣でかすぎるだろ、おまえよりでかくね？」

「魔剣『アナキズム』……だね　意思がないから完全に攻撃力の高いただの剣だけど」

やはり魔剣らしい。

高尚な武器なのにアラマキが持つと冗談にしか見えないから困る。

「何って訓練に決まってるわけで　レベル高くても自由に動けないと意味ないですよ　そう、アナキズムです　けど使いにくいですね　大きさは構わないんですけど手に馴染まないので別のも試してみます」

自分に合った武器を探しているらしい。

大きさよりもじっくり来るかどうかとか。

「聖剣使えよ」

「何言ってるんですか 私の聖剣は武器じゃないわけで」

剣じゃねえのかよ。

なんだこいつ、ホントに勇者か。

「アルファ最弱の理由だもんね、聖剣 先代は精巧な絵柄の書かれた紙束を無限に造り出したとか その前は太っていた勇者が突然痩せて顔が変わったらしいよ」

「色物ばかりだな 現にアラマキ見てたら納得してしまうな」

アルファの勇者は他の勇者と交戦するまえに撃破されてしまうとか。召喚する意味あるのだろうか。

「たぶん、その紙束は私の世界のお金かな 後者はイケメンとかニコポナデポが理想だったとか 運が悪かったのにはちがいないわけで」

アラマキが白い髪飾りを髪から外す。

結っていた時には気付かなかったが、髪は長いようだ。

「髪にクセがあるので恥ずかしいわけで 金色のねちょねちょを洗ったら艶が凄い」

「気にしなくてもいいんじゃないね 可愛いと思うけどな」

「うん、可愛いと思うよ そっちのほうで女の子らしいし」

髪を抑えていたアラマキが赤面して慌て出した。  
普通に恥ずかしがっている姿は年相応に見える。

「えっとえっと、ありがとゴザイマス？ 気にしてるのを褒められても複雑なわけで 恥ずかしいんで話を進めます！！ 異論は認めない！！」

「好きにしろよ 騒がしいやつだな」

「何なんだろうね もう少し落ち着けばいいのに」

まだ顔が赤いが話を進めるらしいので指摘しないことにする。  
もっと弄れそうだが許してやる。

「変な汗かいたし、顔も火照ってるし とりあえず落ち着くのよアラマキ……さん、に、いち おちついたー^^ ふう、間違いなく落ち着いたわ」

「良かったな」

「良かったね」

良かった良かった。

復帰が早くて俺もうれしいよ。

「よし、話を進めますね この髪飾り、見た目は玉簪に似てますけどアルファの聖剣です」

「タマカンザシってのは剣の形はしてないんだな 遠くからでもそうだったが、近くで見ると綺麗なもんだな」

「英雄が使っていた物が聖剣と呼ばれるから、必ずしも剣であることとは無いんだろうね 武具だって多種多様な形状をしているだろうし」

昨夜見た雪のように真っ白な髪飾りで淡く光を放っている。

小さな玉を細い棒が貫いたような形をしており、アラマキの黒髪によく映えるのだ。

「これは勇者が持つ聖剣の中でも特殊なんです 他のようにステを特化させるのとは違い、自分で引き寄せるわけで 説明しにくいんですけど、何とか伝えるなら理想を持つてくるって感じですね 先代はお金持ちの姿を、その前はモテる姿のように」

「超どうでもいい話だった 飯にすんぞ 朝飯は肉だ、肉」

「ボクは面白い話だと思うよ 勇者と聖剣は繋がっていて、意思を介して超常に接続するのだから、さじ加減次第で何でも出来るかもしれない アルファの聖剣なら安定はしないけど、強大な力を得ることも不可能じゃないよ」

つまりアラマキは分の悪い賭けに勝ったみたいなものか。

アルファは試合に勝って勝負に負けたようなものだし、思い通りにはいかないんだな。

「私が何を引き寄せたかとか興味ない感じですね なにこの敗北感、悔しい…… え、朝食がそれ？ おかしくね？ 竜とか朝からとかボリウムたつぷりとかそういうレベルじゃないでしょ？ 朝からイベント発生とか許してくれませんか？ そろそろ常識的に考えさせて欲しいわけで、常識的に考えて」

なんか独り言が激しかったので先に家に戻ることにする。  
イコを待たせるなんてとんでもない！！

「パンに味付けした肉と薬草を挟めばいいよな スープもあるし」

「今日も美味しそうだよ さすがだね」

素晴らしい手伝いがあったからさ、なんて言いながらにこにこしているイコを見詰める。

なんという幸せ、時間が止まればいいのに。

「ちくしょー！！ 私は勇者なんだぞー！！ もっと構え！！ 置いていくとか酷すぎ！！ 帰り際にエンカウントして竜殺ししちゃったわけで！！ あ、いい香りですねー いただきまーす」

「……食べるか」

「ふふ、そうだね」

イコはににこにこしながら食べているし、アラマキは喉に詰まらせている。

いつもより賑やかな朝食だった。



まもののにくうまい。

いこかわいい。

あらまき……。

「今日も頑張るか」

「うん、がんばろうね」

今日もイコが可愛い。

可愛いのに優しいって無敵だ。

「今日も頑張るわけで

うん、頑張ってね」

今日もアラマキが馬鹿だ。

独りで何かやっている。

「わ、私だつて寂しいんですよ！！ 村長さんと村人さんが畑仕事をしてるのを横目に空河の流れを見極めたり、雲の形から魔物を連想したり、外周で訓練するとかもうウンザリです！！」

「働かないで食う飯は旨いか」

「前に働きたくないでござるって言つてたよね」

イコと一緒に今日も頑張ろうかと畑に来たときにアラマキが騒ぎだした。

ダメ人間すぎる、勇者なのに。

「もういいです！！ 『竜殺し』を極めてきます！！ 究極の竜殺しが知りたいって泣き付いてきても知りませんからね！！」

「『竜殺し』は微妙だからいらんなあ」

「『龍殺し』の下位互換だから不必要だもんねえ」

森へと走り去るアラマキを見送ってから薬草を見て回る。  
そろそろ収穫しても良さそうだがエーテル込めを欠かないようにする。

「ここら辺が少し足りないみたいだよ」

「どれどれ……ああ、必要だな」

イコと手分けして一つ一つ見て回り、輝きの足りない薬草にエーテルを与える。

毎日欠かさず行うことで収穫しても輝きを失うことのない金色の薬草になるのだ。

「そろそろ手紙が来るだろうか」

「どうだろうね　いつもの間隔なら来る頃だけど」

同じ作業の繰り返しだがイコとの共同作業なので飽きが来ない。  
むしろ太陽と薬草の光がイコの美しさを際立たせていて目が幸せ。

「とりあえずアルの手紙で勇者が中央にいるか確認したいんだよね」

「アルの手紙がどこから来たのか分ければ勇者の居場所もわかると思うよ　いつもの竜籠なら中央にいるかもしれないね」

中央のマグと折半しているのだから二人の手紙が同時に来れば未だに居ることになる。

前回も来ていたし、内容は読んでいないが流石に勇者に見放されたとか無いだろう。

「収穫したら耕すだけでいいよな 中央に行くのなら手間懸けられないし」

「そうだね 枯らしちゃうし、枯れなくても使えないもんね」

最初は金色なのだが目を離れた隙に緑色になってしまふのだ。

これは役立たずで苦いだけの雑草となり、どれだけ努力しても金色にはならない。

「神様も好まないしな」

「まあ、そうだよな」

ポーションは凄いと聞くし作ってみたいものだ。

魔法薬の分野らしいのだが薬草を使って作れないだろうか。

「というかシンカイは何をしてるんだろうな」

「なんだろうね 勇者の後ろには国がいるだろうし狙いがあるに決まってるよ 怪しいね」

国家転覆や勇者殺しとかやってくれないだろうか。  
混乱に乗じて狙いやすそうだし。

「わからないな」

「わからないね」

迷宮探索とかは流石にないだろう。  
ホントにわからん。

「勇者も暇……」

「一人で狩りとか寂しいです…… やっぱり働かせて欲しいわけで……」

「シンカイはわからないけどアラマキは暇人だろうね」

首を傾げるアラマキを見てイコの言葉に同意する。

他の勇者と比べて最も暇な勇者が目の前にいるからだ。

「……頑張れ」

「……頑張つてね」

「応援された！？ やめて！！ 私を憐れまないで！！ うわああああん！！」

イコは美しい。

それでいて優しいのだから非の打ち所が無い。

「わかつたから仕事するぞ とりあえず輝きが薄れてる薬草にエーテルを込めるんだ 全体に染み込んで行き渡るようにするのがコツだな」

「エ、エーテル！？ エーテルを込めるとか異次元すぎるのだけれど！！……まず違いがわからないわけで」

「ほら、これだよ」

イコが指差した先に曇った薬草があり、アラマキが「……よ、よー

し、私だつて仕事できるつてことを見せ付けてあげますよ」なんて言いながらエーテルを込めた、たぶん。エーテルを込められた薬草は黒ずんだかと思うと、ジュワツと音を立ててどろどろに溶けて地面に染みを作った。

「うわぁ……」

「ひぁっ！？ え、私が悪いの！？」

悪いも何もどうやったらこうなるんだ。  
方法を知りたい。

「アラマキはエーテルじゃなくて魔力を出してるんだよ エーテルの放出なんてボクには出来ないし、アラマキにももちろん出来ないよ だから見付ける手伝いしかしてないんだ」

「はぁ、エーテルの放出とかユニークスキルみたいなモノですかね」

じいさんと父さんは出来たんだがな。

イコは一緒にいてくれるだけで最高なのに手伝ってくれるとか幸せすぎる。

「じゃあエーテルが足りてないやつだけ教えるよ」

「むりむり、見分け付かないもん なんですか、エーテルを見分けるって そんな超絶スキル持つて無いわけで …… 何ですかその目 流石にこいつ使えねーとか言わないでしょ？ 無理なモノは無理なの」

こいつ使えねえ。

じいさんも使えたし、父さんも使えたし、俺も使えるし、イコも使えるし普通だろう。

「常識が、足りない……っ！！ 圧倒的な欠如……っ！！ 満ち溢れる非常識……っ！！ 非常識の侵略……っ！！」

「ほら、落ち込んでないで ボクも昔は使えなくて覚えたんだよ 教えてあげるから邪魔しちゃダメだからね」

イコに教えてもらうとかご褒美すぎる。  
羨ましい。

「収穫するか 良さそうだし」

「そうだね」



アラマキが修得するまで待つていたら日が天辺に来ていた。  
勇者の評価が下降しまくって困る。

「……もう目が焼ききれそうなわけで やつと見分けが付いたと思  
つたらスキル『核識』を修得とか 相手のステを見抜くレアスキル  
とか修正されても知らないですよ」

「イコは可愛いな」

「ふふ、照れるね」

銀髪を撫でると柔らかくて滑らかな感触にずっと触っていたくなる。  
イコの体は暖かいので抱き締めながら撫でたら幸せになれるだろう。

「……無視にも馴れましたよ いいですよ、村長さんのステ見ます  
……見えない、だと!? む、村人さんは……?」

「ボクのを見たら死ぬことになるからね」

「りよ、了解しました…… うう、せっかく修得した『核識』使  
いたいお…… 霊薬のコンディションを見るだけとか宝の持ち腐れだ  
お……」

イコの魅力を語り尽くすにはそれこそ一日では事足りない。  
なぜならピンと立った大きめの狐耳から足の先まで余すことなく美しいからである。

「村長さん、仕事しないんですかね？」

「ん、ああ ちょっとイコに魅了されてた」

「ふふ、『魅了』スキルは持ってないよ」

イコが『魅了』を使ったら俺は死ぬ。  
目から幸せが逆流して頭が焼ききれるからだ。

「気を取り直して……盛り下がったな よし、やるか とはいっても収穫は楽だからな 植えるのや水やり、エーテル込めのように汗水垂らす面倒な手順は無いからアラマキでも出来ると思うぞ」

「なんで私の顔を見たら盛り下がるんですか それって凄い失礼なわけで 訴えますよ」

イコを見てたら盛り上がってしまうからアラマキを見て落ち着いた

だけだ。

イコくらい絶世の美女になったら文句を受け付けてやる。

「わかったから落ち着け　じゃあ説明するぞ　まず薬草が生えている範囲にエーテルを込めた『震脚』を使って浮かせる　この時の衝撃は上向きだから　次にイコが薬草を手元まで寄せてくれるので拾いに行かなくて済む　ほら、簡単だろ」

力加減が少し難しいくらいだろうか。

『震脚』すると次に植えるときにエーテルの混ざった良質な土になって薬草も金色になるやすい。

「無理」

「役に立たねえな」

「勇者なのにね」

地面踏んで、イコに薬草を引き寄せてもらって、終わりだ。  
難しい事はないだろう。

「いやいや、無理なものは無理だってさっき言ったじゃないですか  
天井はよくないです　不思議そうな顔しないでください　わかり

ました つまるところ『震脚』のスキルを持ってないし、エーテルを込めるとかよくわからないし、村人さんが念動力みたいな使ったし、収穫物が消えたしで勘弁してください 私でもわかるほど村長さんの常識がヤバいわけで」

「つまりアラマキは無能ってことが」

「無能勇者アラマキって妙にしっくりくるね」

異世界から来たアラマキに常識のことを言われたくない。それに困ったときには聞けば教えてくれるイコという美しくて素敵な女性が俺にはいるのだ。

「馬鹿にされるのがデフォとか悲しすぎるよ……」

「なら改善しろよ」

今日のアラマキは出来ないとしか言っていない気がする。どうしようもない。

「明日から頑張ろうと思うわけで」

「絶対に頑張らないよね、それ」

アルファでの生活でアラマキが精神的に壊れたんじゃないだろうか。そう思わないと可哀想すぎる、頭が。

「薬草を食べても変わらないから、精神的には問題ないと思うよ」

「やはり頭が可哀想なのか……」

「あれあれ、お二人さん 酷すぎない？ やめて！！ 私を憐れまないで！！ うわああああん！！」

薬草を収穫。

スキル次第。

無能な勇者。

「手紙が届いた それも二通、な」

一通はマグの手紙、上質紙。

もう一通はアルの手紙、高級紙。

「うん、いい頃合いだね 運命すら感じちゃうよ」

いつもと変わらずにここにこしている。

俺も毎日運命を感じています。

「アルの手紙にこれ程まで焦がれたことがあっただろうか……いや、無い そして今もそんなに期待してない」

「ふふ、無いんだ？」

あるわけが無い。

イコの一言一句には恋い焦がれるけれども。

「この紙質を見るよ 勇者が中央にいる証拠だろ」

「うん、いい手触りだし文字も全く滲んでないよ 紙もインクもすごく良いものだね」

いつもなら紙を洗うのだが、今日は手紙本来の役割を果たさせてみる。

内容があれだったら洗うのだが。

「勇者への愛憎で溢れてるな」

「読んだ限りでは勇者が『魅了』を使ってるって言ったほうがまだわかるくらいモテモテだね」

何かする度にモテるらしい。

宿、店、迷宮、遺跡、寂れた村……行く先々に美女がいて、勇者に惚れるとか呪いだろ。

「同じ勇者でもかなり違うんだな……」

「ふふ、そうだね」

今日こそ竜殺しを極めるわけで、とか言いながら森へと駆けて行つたアラマキを思い出す。  
合う武器が見付からなくてヤケクソなのか完全に剣の形では無い物を使うようになっていた。

「ボクは嫌いじゃないけどね」

「いや、俺だって嫌いじゃないがな」

やっと村から人がいなくなったのに、嫌いなやつを村人にはしない。アラマキは馬鹿っぽいけどホントに馬鹿ではないと思うし、単身で国を飛び出した気概は買っている。

「まあ、考え無しするときもあるな　あの不安定さはどうにかすべきだが」

「感情を優先するんだろうね　高望みしてないようだし大丈夫だよ」  
全てを望んではないようだ。



得るために捨てることを知っていて弁えている……潔すぎることもあるが。

「相手がどう思ってるか、だな」

「そればかりは察するくらいしか出来ないね」

薬草をとったり、レプリカの話題が出たり、異世界の話をしたりしているときなどに一瞬だが観察するような目をしていた。全てが素ではないということか。

「半々、は言い過ぎだな 七三くらいか」

「八二かもしれないよ」

アラマキの馬鹿と素の割合である。  
七割から八割は馬鹿っぽいと予想。

「警戒されてるってわけでも無いし、ゆっくり過ごせば問題ないと思うよ」

「そんなもんか」

「ふふ、馴染んできてるしそんなもののさ」

イコはどこか嬉しそうに微笑んでいる。

俺はイコが何故いつもにこにこしているのか未だにわからず、何度も直通聞いているのだがやはりわからない。

「イコはいつも笑っているな 何故なんだ？」

「イヤかな？」

「そんなわけない 綺麗だし、好きだな」

イコの笑顔は気持ちを感じられるから好きだ。  
純粹で優しい好意を。

「ふふ、照れてしまうけど嬉しいね 笑顔なのは……うん、秘密かな  
ボクだって恥ずかしいことはあるんだよ？」

「ふうん？ まあ、イコがそう言うならいいか」

今回もわからなかったが、それでも良いのだと思う。  
結局、出逢ったときと変わらずに綺麗な彼女が笑っていられること  
が俺の幸せだから。

「それにね、君も笑っているんだよ？」

「ん？ ああ、そうか 気付かなかったな……まあ、イコがいるか  
ら当たり前だな」

イコがいるから幸せ。  
笑ってくれているならもつと幸せ。

「ボクもそう、かな ……きつとそうだ 笑っているのは君がいる  
から ふふ、ボクにとっても当然なんだね」

「イコ？」

何度も頷いて納得したように呟くイコは頬をつつすらと赤らめて嬉  
しそうだ。  
そんな姿が可愛くもある。

手紙が二通。

マグが一通。

アルが一通。

アラマキが魔物を狩ってきた。

一目見たところでは深い傷は無いが治療の必要があるだろう。

「どうですか！　ご飯とってきましたよ！！　これで私も役に立つでしょう！？」

「わかったから薬草食え」

キメ顔でのたまうアラマキの額に薬草の湿布をぺしりと貼り付ける。汁をぶっかけてもいいのだが断られるに違いないので傷口に貼り付け、薬草を口に詰め込む。

「むーしゃむーしゃ、んんっ……どうですか、これ　亜龍ですよ！　『龍殺し』を取得してまで屠ってきたのです！！　褒めてもらってもかまわないわけで……むしろ褒めてください！！」

「うん、凄いな　すごいんだけど、猛毒を持ってるから危ないよ」

高揚しながら指差した先には禍々しい形をした死骸が転がっていた。家くらいありそうな巨体を引き摺る苦勞をしたアラマキには悪いのだが、イコが言った通りこいつは猛毒を持っているのだ。

「そ、そんなぁ……　見たことないから仕留めてきたのに……」

「見たことないのに食おうとすんな　つつかどう見ても毒をもらってるのにぴんぴんしてるのはどうよ」

腕や頬の一部の皮膚の色が毒々しい黒紫色になっている。  
アラマキの表情からは毒のダメージを窺い知ることはできない、なぜなら常に絶不調な顔だからだ。

「今日明日くらいは寝てないとダメだよ　いくら勇者だからって甘く見るのはよくないからね」

「え、ダメなんですか？　ほら、見てください　この魔力、すごいでしょう　大丈夫ですよ　もう一匹ノリで仕留められそうですし……働かないお荷物なのはなんといいか心苦しいわけで」

「イコの言つとおりだな 魔力はいいから寝てろ」

見える範囲の傷に湿布を貼り終える。

細かいところはイコにやってもらって包帯を巻くことにしよう。

「どうしてもですか？」

「どうしてもだな」

「どうしてもだよ」

嫌そうにアラマキが聞いてくるが返答は同じだ。  
俺とイコが頷く。

「むむむ……じゃあ、見てください 私の瞳を 滑らかな輝きのあ  
る黒は健康の証なわけで」

「どす黒く濁ってんぞ」

憎悪の泥の底と表現してもいいくらいに輝きが無く、濁っている。  
これでも拾ったときよりはマシだと思えるから凄い。

「濁って……」

「あと隈がすごいから寝た方がいいよ」

夜は魘されているらしく、日に日に目の下が黒く染まっている。  
濁った黒目と深い隈が暗黒面を作りだしている。

「じゃ、じゃあこのぴちぴちの肌は？ 健康の証なわけ」

「いや、青白くて病人みたいだからな アンデッドのグールとかに  
間違われかねない」

肌も真っ白だったが、拾った時から徐々に瑞々しさが失われている。  
体調を崩していないのが不思議でならない。

「えつとえつと、じゃあ……」

「いいから寝ろよ」

「落ち着きなって 別に追い出さないから、ね？」

もしかあつ!!と音がするくらいイコがアラマキの口に薬草を詰め込む。

髪もパサついているし、煮汁で一時的にうるおいを取り戻すらしいが気休めでしかないのだろう。

「まあ、食える部位もあるし苦労したアラマキのためにテキトーに料理してやるよ」

「食用以外にも使い道があるからね 亜龍だから素材としても高級だし、何より毒がすごいからね」

亜龍は魔物が進化した姿である竜がさらに進化した龍である。毒も強力に進化しているので使い道は様々だ。

「うっ、レベルが上がってしまった 食べて上がるとなんか理不尽…… え、まさか私に毒を盛るとか……」

「ねえよ」

頭を軽く叩く。

中身が入ってないようなポコツという小気味よい音がした。



「心配しすぎだよ」

「そういう環境だったので……」

イコとアラマキを横目に亜龍を影に縫い付ける。  
倉庫要らずで非常に便利だ。

「なぜ消えたし」

「ギフトだ 収穫した薬草から加工した品物、農耕具から影に縫い付けられるのがクラスアップ前の効果でな 容量の限界は知らない」

戦闘時のギフトは以前のものがクラスアップした状態で天上の仕様を縫い付けるとかそんな感じで超常の仕様の恩恵を受ける。  
前のは影に物を入れる便利な収納空間として扱っていて今も現役だが、『加速』が羨ましくなるのはしょうがないだろう。

「ギフトが本当に便利です 何かあったら全部ギフトで済ませるレベル」

「まあ、当たってるよね」

ギフトとは突出した才能が形になったもの、らしい。  
目に見える形で神が与えたとか。

「どれくらいの力を発揮できるかは個人の練度次第だけだね」

「私も鍛えようかなあ……」

長くなりそうなのでアラマキを担いで部屋へ向かう。  
龍の羽根は取り除いたので文句はないはずだ。

「なんという横暴　自分で歩けるわけで」

「そうだな」

「そうだね」

軽い。

中身が入っていないんじゃないかってくらい軽い。

「そういえばギフトって一つしか発現しないのか？　複数持つてるやつを見たことが無いんだが」

「そうだね普通は一つだね　でも、例外もあるよ」

機神を頂点とする機人という魔人に分類される種族が二つ持っているらしい。

どうせ出会うことはないだろうから詳しく聞かなくてもいいだろう。

「ほら、着いた　大人しく寝ろ」

「やっぱり寝ないとダメ……ですよね　わかってるわけで」

「そう嫌がらなくても　ほら、包帯巻くからね？」

俺はお茶を淹れるとしよう。

薬草になれなかった緑の葉を乾燥させた茶葉は少し苦いが後味も悪くないので気に入っている。

「傷はどうだった？」

「そんなに悪くないし明日も寝てればそれなりに大丈夫だよ」

部屋に備え付けられた椅子に座っているイコが答える。

別の部屋から持ってきた椅子に腰かけて茶を啜る。

「これが本物の薬草を使っているというべきか……　というか霊薬とかエリクシルをあんなに食べさせられるとか過保護すぎるわけで……」

「どうしたアラマキ、毒で頭が悪くなったのか」

「頭は前からだよ　毒が回ってたらむしろよくなっていたかもね」

頭の良いアラマキ……？  
想像もつかないな。

「いや、なんでもないです　というか村人さんはわかっててやってますよね？」

「ふふ、何がかな」

イコはにこにこアラマキを見ている。  
突貫で屋根を造ったがいい出来ではなからうか。

「なんでもないですよ　……寝ますね」

「うん、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

お茶を飲み終えたので大人しく寝るようだ。  
イコが横になったアラマキに布団をかけている。

「……」

「……」

「……」

金色のお茶もいいが、これも悪くない。  
イコもにこにこしながら飲んでるし。

「あの……」

「どうしたのかな あ、もしかして寒かった？」

イコが甲斐甲斐しく世話をしている。  
少し過保護かもしれないが、これくらいがアラマキにはちょうどいいのかもしれない。

「あ、ありがとうございます えっと、畑の仕事しないんですか」

「ああ、しない 簡単な作業だしすぐにやらなくてもいいだろう  
なんなら明日の朝にでもやっておくか」

「まさに朝飯前だね」

そうだな。

イコは朝飯前が好きらしい。

「そうですか……」

「まあ、俺とイコは看病だな 毒もらったやつを放置するわけにも  
いかないだろ」

「ふふ、そうだね」

油断はよくない。

一日エーテル米を欠かした隙に薬草が緑になるように、気の緩みで取り返しのつかないことになるのは避けるべきだ。

「村長さん、村人さん」

呼ぶ声のほうに顔を向ける。

アラマキは布団で顔を隠していた。

「……私、アルファから抜け出して良かった」

「……そうか」

顔を半分だけ出してこちらを見ながらアラマキは言った。  
小さい声だった。

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

僅かな時間で寝息が聞こえてきた。  
アラマキを見ながらぼんやりとしていてお茶は冷めてしまったがま  
ずいとは思わなかった。

「眠ったね」

「ああ」

起こさないように小さな声で会話をする。  
今もにこにこしている。

「安心して眠ってほしいね」

「……そうだな」



状態：毒

多種多様に存在し、冒険者を苦しめる。

「まあ……死んでも生き返りそうなアイテムばかりですけどね」

「ちよつとくらいなら死んでも大丈夫だよ？」

蘇生にも限度があるらしいのだ。

試したのだからある程度の時間を超えると障害を持つことになったり、身体機能が著しく低下するようでは完全に引き戻すには死亡した直後が効果的だ。

「神様の好物でもある薬草に隙は無かったな」

「洗剤の洗剤から蘇生まで万能だもんね　勇者も毒に耐性があるみたいだし」

解毒もこなせる薬草である。

これを更に強化したというのがポーションらしいので中央に行った際には是非とも見てみたいものだ。

「見せてもらいましょうか 村長さんの畑を耕すつてやつを」

「普通だと思うがな」

「アラマキ、もう少し下がらないと危ないよ」

どうしても見たいと駄々をこねたので椅子を外まで持ってきて、アラマキを座らせたのだがそこまで興味を持たれるのかよくわからない。

寝ていた方がいいと思うが、しょうがない。

「危ないとかいきなり異次元ですね ファンタジー世界に来てインフレ展開になるのが農耕とか私の人生がイロモノすぎて言葉にできないです もっとカッコいい感じになると思ってたわけで」

「ほらほら、いいから下がるよ」

イコが椅子を引っ張って後ろへと下げる。  
アラマキは、まあ……いつも通りだ。

「まず鍬を使う」

「なんとなく神々しさ」

鍬に目分量でエーテルを込める。

多すぎると耕す範囲が拡大しすぎて村を半壊させてしまうかもしれないが大丈夫だ。

「で、『震動』で地面を叩く」

輝きが伝搬しながら土の表面が隆起していく。

アルとマグの家があったところも畑にしたので苗を植えるのが大変な気がする。

「クワで耕すってレベルじゃないわけで もうどうしようも無いところまで行っちゃってます というか鍬を使った意味あるんですか」

「使いなれてる武……農具を使ったほうが調子がいいからだ」

「そうだね 武……農具なら使い慣れてるほうがいいもんね」

使い慣れてれば包丁でアラマキが捕ってきた亜龍を捌いた。  
頑張れば包丁で龍殺しができるかもしれない。

「もう武器でいいじゃないですか 竈ってる神気が異常ですよ マジどこに向かつてるですか」

「去年くらいに神器になったんだよ、あの鍬 つまり神クラスの恩恵を得た状態でも全力で武器が使えるってことだからね」

まな板は斬れないから微妙かもしれない。  
さすがに包丁では無理か。

「聖剣・魔剣と鍬が互角に斬り合うとかおかしいと思ったんですよでも、薬草にエーテルを与えてレベルアップさせて霊薬のクラスにまで持っていくのを見せられて、鍬は神器にクラスアップさせてたとか非常識見たら納得しました 村長さんマジでヤバイ」

「料理にもエーテル込めるからね 中央で料理屋をしたら客は全滅だと思うよ 高濃度のエーテルに充てられて魔毒にもならずに融解するに違いない 子供だったら料理を目の前にしただけで死ぬかも」

「ヤバイですよ、それ もう少し常識を教えたほうがいいです 怪我人を見かけて治療したら死んでたとか事件なわけで」

そういえば鍬で切り裂ける竜って柔らかすぎないのか。  
生物だし、柔らかい種類もいるのかもしれない。

「そうかなあ……」

「私だってファンタジー初心者なので何かあったらフォローできま  
せんよ」というか私も常識が微妙なわけで」

というか竜ってどのくらい強いんだかわからん。  
魔物の進化って言うがまずどのくらい強い魔物だと進化するんだ。

「……ちよつとずつ勉強していこうか」

「お願いします 一撃で竜を殺すのが常識とか思ってるのはヤバイ  
です」

「何の話だ？」

珍しく眉根を寄せて困ってるイコに声をかける。  
曖昧に答えるばかりで要領を得ない。

「えつとですね、ええと……あれです！！ あれあれ、あれですよ！！ あれ！！」

「あれ……墓のことか？」

アラマキが指差した方向に目を向ける。

かなり小さいが墓が見えるのでそのことだろう。

「そ、そう お墓のことだよ アラマキが話したいことがあるんだ  
つて」

「そうなのか？」

「え……？ それはですね、えつと はい、そうです」

拳動不審だったアラマキがイコに微笑まれて落ち着いた。  
見惚れたのだろう、気持ちはわかる。

「あの墓をですね……」

「墓を？」

「墓を……動かす　そう、動かすんです！！　ギフトで影に縫い付けば称号の範囲も自分を中心としたものになるんじゃないですか！？」

名案だな。

これが通用したら『龍殺し』が要らなくなるが。

「ちょっと試してみるか」

墓に近づく。

アラマキがイコを睨みながら詰め寄っていたがどうしたのだろうか。

「お、入った　とりあえず遠くまで行って称号を試してくるか　ん……？」

シラユキの墓があつた場所に白い剣が埋まっていた。  
土に塗れていて薄汚い。

「どうかしたのかな？」

「ああ、なんかこの剣が埋まっててな　父さんが使ってたのに似てるなと思って」

「骨とかじゃないですよね？」

ねえよ。

汚れているのは鞘だけなので中は綺麗な状態かもしれない。

「刀ですね 普通に売ってるのとは違うような……」

「カタナ？」

「斬ることを目的にした剣だね 扱うのにも技術が必要だし、力を込めすぎると折れてしまうんだよ」

武器としては繊細すぎる。

俺には鍬があるし使わないだろう。

「ちょっとギフト試してくる」

「あ、これ調べていいですか 『核識』を使ってみたいわけ」

「ボクも興味あるかな」



許可を出して森へ向かう。

とりあえず確認だけなので戦闘する気はない。

「とか言っておいてぶち殺してたら世話ないよな」

眼前には巨大な白狼の死骸が転がっている。

群れを統括していたようでこいつを仕留めると他のやつらは散って行った。

「いい感じ……ん？」

白狼を収納している最中に感じる違和感。

ギフトがいつもと違うような……。

「みたいなことがあった」

「良かったね、ギフト使えて」

ギフトの違和感を省いて説明する。  
功労者のアラマキを撫でまわす。

「ありがとな」

「おおー、なんという…… 咄嗟のでまかせだったのに褒められてしまったわけで もう私のテンションが有頂天ですよ 出会った人に片っ端からこの喜びを話したい、そして理解できなければ灰塵にしたいわけで 世界が私に従うように戦争を仕向けて滅ぼしたい『魔神の目覚め』でアルファごとすべてを焼き尽くすとかどうですか!! 今なら『煉獄七夜』とか『星降る夜』もセットにしちゃいますよ!!」

「うん、そうだね 落ち着いたらいいんじゃないかな」

イコに聞いたが古代魔法という種類の滅びた魔法らしい。  
超上級の魔導師ジョブを持つてるかもしれないとか。

「でまかせ？」

「……あ、そうでした この刀ですね、見たところは普通の刀でした」

「特別な力も無いみたいだね」

返事をして白く磨かれた刀を影に入れる。  
墓から出てきたのだから持っていることにする。

「ん……」

「どうやら解放されていない部分があるらしくて……どうかしたんですか？」

ギフトに違和感を感じた。

見ることができない部分は認証しないといけないとか。

「いや、なんでもない 認証ってどういうことだ？」

「開示されない情報があつてね どうやら条件があるらしくてそれを突破すると変化が起きるかもしれないって感じだね」

「それまでは普通の刀ですね」

どんな条件かわからないのでどうしようもない。  
とりあえず放置である。

「銘は『白雪』だよ」

「へえ」

「興味ないんですね……」

俺はどうせ刀は使えないので興味はない。  
イコが楽しそうだから持ち歩くけれど。

鍬があれば龍殺しから農耕まで幅広く活用できます。

でもお高いんでしょう？

そんなことはありません、毎日鍬に経験値を与えてレベルを上げるだけ……気付くと神器に早変わり！！

まあ、素敵！！

「悩むな」

空から落ちてきた龍の死骸を前に考える。

欠けていた部位は修復したので問題なく機能するだろう。

「うん、悩むね」

俺とイコが見つめる先には薬草から加工した品々が並んでいる。

一つ残らず黄金に輝いていて、この世の富を手中にしたかの錯覚を覚える……と表現するのは大袈裟だろう。

「飴だと弱すぎるんだよな 延命も効かないし」

「龍だからね かなり強力なのを使っても大丈夫だと思うけど」

煮汁やジャムでは劣化が防げない気がする。  
もっと効果的なモノは……。

「そつえばアラマキが屠ったやつ逆鱗を煮込んだ物がある」

「亜龍とはいえども龍だし、核には十分じゃないかな」

アラマキもいい仕事をする。  
家から大鍋を取ってくる。

「二人は何してるんですか」

アラマキも着いてきた。

『震脚』の練習をしていたらしい。

「ああ、中央に行くから村の留守番をこいつで賄おうかと思ってな」

「龍なら役割を十分に果たせるだろうからね」

最初は白狼を使おうとしたのだ、番犬とかしっくりくるし。

代わりに龍に乗って行こうとしたら騒ぎになると止められたので立場を逆にして運用するのだ。

「中央？」

「ルア・ルカの王都グラウスだよ 国の中心だから中央って呼んでいるんだ」

「アラマキが行かないで留守番してくれるなら適当に見繕うんだが」

「いや、行きます 行かせてください 荷物持ちから火の番までします ここに一人とか嫌なわけです」

置いて行く気もないのだが。

あと荷物は俺のギフトで持つてくから荷物持ちは必要ない。

「そうか で、アラマキの代わりに留守番係りを龍で造るところだが核をどうしようかと相談してた」

「今は逆鱗のジャム煮で決定したから試すところだよ」

「連れて行ってもらえるだけでうれしいです もう何も言わないわ

けで」

若干だが煤けたようなアラマキを横目に龍の腹にジャム煮をぶち込む。

あとは『核識』で様態を見ながらエーテルを注ぎ込む。

「魔物は楽でいいな 人間と違って核を埋め込めば問題なく動くし」

「龍は血液の代わりに魔力が大半を占めてるからね 最低限の障害が無い状態で機能が取り戻せるのはありがたいよ」

身体の劣化箇所を魔力を送って修復する。

ジャム煮も核として機能しているようで送り込んだエーテルや、周囲の魔力を取り込み始めた。

「名前はシャロンにしよう こいつは前世よりも強そうだな」

「うん、いいと思うよ もっと強くなるように色々いじってみようか」

「和やかに名前付けてるけどやってることが理解不能ですからね もう私の常識は死んだ」



『生命創造・偽』のスキルを取得してしまった。  
何かやるたびにいろいろ得るから無視することにする。

「魔物つて魔力で身体が構成されてるんだろ 限界まで込めて魔毒の直前で放置して、落ち着いたらまた限界まで込めて、を繰り返して究極を目指すとかどうよ」

「いいね、わくわくしてくるよ」

「ついでにエーテルを与えてレベル上げしようよ ランク上がったなら何になるか気になるわけで」

いい感じの改造計画が立ち上がった。  
遠い目をしていたアラマキも乗り気である。

「よし、じゃあやるぞ 目標はこの紙に描いてある『わたしが考えた最強の龍』だからな」

「さすがアラマキ、考えることが違うね」

「ちょ、黒歴史の公開はやめたげて!! 暇だったから描いてしまったんです!! 悪気はなかったのです!!」

アラマキが高級紙にラクガキしていたのを思い出した。  
もったいないので構想を再利用する。

「遠慮するなよ 俺がおまえの妄想を叶えてやるよ 泣いて喜べ」

「紙を無駄にされたからちよつと怒ってるみたいだね 諦めたほうがいいよ」

「謝るんで許してください！！ マジ勘弁！！」

別に怒って無い。

龍が完成したら許してやる。

「まず5倍以上の大きさにする 一對しかない羽を三対まで増やす  
そして頭を三つに増やす 口から黒いブレスを吐かせるようにする  
尻尾が切れて、自立行動をとる そして最大の難関である神の  
ペットにするという設定だがこれはどうすればいいんだ」

「難しいね でも難しければ難しいほどに楽しくなってきたらうよ」

「やめて！！ ごめんなさい！！」

ちなみに「我に齒向かうのか、人間風情が!!」というセリフも言わせないといけない。

あと第二、第三形態も用意する必要がある。

「輝きながら「我が眷属の力を見よ!!」と竜を召喚」

「召喚術も使うんだ　ぐつと難度が上がったね」

「（　。　。　）アーアーキコエナ―イ」

耳を塞いでいるアラマキを見ながら更に読み上げる。  
毒とか持つてるらしいので亜龍の毒を使うとする。

「実は本体は地下にいる、と」

「どうすればいいのかわからなくなっちゃうね」

「ああああああああ」

アラマキがのた打ち回っている。

どうでもいいが土で汚れるぞ。

「冗談だ　ここらで完成にしておくか」

「え、冗談？」

「さすがに無理があるからね、さっきのだと」

龍を想像しながら魔力を込めたので思い通りの形になっていた。  
とげとげしていて赤黒い外見はまさに龍である。

「なんと禍々しい……」

「足と尻尾が大きくなってるね」

「鱗を重厚にしたらバランスが悪くなると思って足と尻尾を強化した　ついでに羽根を強化したから防御にも役立つだろうな」

発される魔力は以前の比ではない。

これなら勇者が来ても鎧袖一触だろう。

「墮龍だね 蘇生したから龍種とは言えなくなったみたいだけど、本質はほとんど変わらないよ」

「ユニークモンスターですね もう好きにしたらいいわけで」

金色に輝く瞳がカッコいい。  
俺の感性に任せて正解だった。

「ああ、かわいいだろ」

「うん、かわいいね」

「……」

ぐるるる、なんて喉を鳴らして甘えてくるのだ。  
性格は温厚で真面目とみた。

「次は白狼を蘇生だな」

「核はどうしようか ジャムでいいかな」

「ええー……まだやるんですか」

せつかなので亜龍の素材で強化することにしよう。  
やるなら完璧を目指すべきである。

「アラマキだって四足歩行する魔物に騎乗したいって言ってただろ」

「ファンタジーに来たら狼に乗りたいてって言ってたよね」

「はい、言いました 常識をちょっと捨ててきます」

狼に羽根は合わないな。

牙とか爪だけ移植するか。

「中身も変えたらいいんじゃないかな 亜龍のほうが強靱だから魔力やエーテルも込めやすいよ」

「なるほど、中身か ついでにプレスとか吐けるようにするか」

「逆に龍の内臓を追加しましょう 上手く機能すれば圧倒的な力が入りますよ」

イコとアラマキの意見を取り入れながら改造する。  
改造を終えるとなぜか称号『ファウストの狂気』を取得してしまっ  
た。

村長の楽しい生命創造！！

用意するもの ・ 龍<sup>カロン</sup>一匹 ・ 亜龍の逆鱗（ハイドラの派生体）  
 ジャム（大エリクシル） ・ スキル（生命創造・偽） ・ 才能  
 手順

- 1 ・ 逆鱗をジャムで一晩煮込む
- 2 ・ 煮込んで出来上がった月夜の水を核として龍に移植
- 3 ・ 不具合を確認しながらエーテルと魔力を送る
- 4 ・ 完成

堕龍への派生はお好みで

「乗り心地は微妙だな」

「移動速度は速いけど障害物を避けるからね 動きに緩急があって  
 ちよつと大変だね」

亜龍の機能をふんだんに取り入れた白狼の背に乗りながら会話する。  
 白狼の名前はエリス、特徴は無いが強いて言うならやりすぎて亜龍  
 になってしまったことだな。

「なぜそんな余裕なのか私にはわからない 今すぐにも振り落と  
 される自身があります」



「空から落下しておいてどうなんだ」

「落下は力入れなくてもいいけど、しがみ付く場合は力が必要だから大変……とか？」

なるほど……そう、なのか？

啜えて運んでもらえば解決するんじゃないだろうか。

「アラマキ、食われろ」

「いきなり死ねと？ なぜだし」

「間違えた 噛まれろ」

「結局死にます 勇者だって生身なわけで」

名案だと思ったんだが。

アラマキの丈夫さに賭けたところとか。

「それいいかもしれないね 噛み砕いて胃で運搬して、着いたら蘇

生とかどう？ あ、でもこれじゃ元通りにならないね 死んでから数分経ったらアメで蘇生、そしてすぐ死ぬ、数分で蘇生、を目的の地まで繰り返し返せばいいのかな」

「鬼ですか、あなたたちは 人道に真つ向から反してます」

「鬼って見たことないな、そういえば」

魔人の一種らしい。

ヒトと非友好的な種族が魔人だとか。

「あ、私もです やっぱりお酒とか沢山呑むんですかね」

「どうかな お酒は好きらしいけど闘うのも好きな種族だしね」

「酒呑みで戦闘が好きって酔っ払いじゃねえか」

絡まれたら全力で逃げる。

俺は酒が好きではないし、イコも好きじゃないのでアラマキを掴みましょうかと思っただが酒を無理矢理呑まされる苦痛はわかるので囧はやめてやることにしよう。

「鬼に直接言ったらダメですよ」

「会う機会ないだろ」

「アラマキが勇者だし、出会うかもしれないね」

なんという迷惑。

アラマキを捨てて行こうか。

「まだ森抜けないんですか これ以上揺れると落ちます」

「気張れ 落ちたら置いて行くからな」

「そろそろ抜けれると思うよ」

ときどき襲い掛かってくる魔物に石を投げつけて撃破する。

『魔弾』スキルは伊達じゃない。

「あ、障壁で防がれましたね 竜種でも強いんじゃないですか」

「結構魔力を込めたんだが防がれたか」

「石は魔力が通りにくいからね 攻撃と防御の圧力に耐えられなかったのかも」

直接攻撃したほうがいいかもしれない。  
ギフトを憑けて……。

Now Loading……

「なんか遅いな……」

LV	判定・失敗
HP	判定・失敗
MP	判定・失敗
STR	判定・失敗
VIT	判定・失敗
DEX	判定・失敗
AGI	判定・失敗
INT	判定・失敗

……。  
【『の憑依に失敗しました。』

「失敗した」

「え？ 失敗なんて初めてだね 大丈夫？ 頭とか痛くない？ 熱はない？ 体調悪かったら言ってね？」

「ん、体調は大丈夫だ 頗る健康ってやつ ただギフトが全く上手くない」

RETRY

【「の憑依に失敗しました。」

RETRY

【「の憑依に失敗しました。」

RETRY

【「の憑依に失敗しました。」

RETRY

【「の憑依に失敗しました。」

RETRY

連続アクセス規制中です。

RETRY

連続アクセス規制中です。

RETRY

連続アクセス規制中です。

「ダメだな、絶不調ってやつか バグってたりすんのかな」

「バグって……どこも悪そうに見えないですけどね ちょっと『核識』で診てあげますよ うわぁ……文字化けしてるわけで」

俺の中身が文字化けとか対処法がわからん。  
とりあえず薬草を食べようと思ったがギフトが働かない。

「ギフトがさぼってやがる」

「原因がわからないし困ったね」

ギフトも『縫』の状態である。  
大人しく裁縫をしてろってことだろうか。

「あの竜どうしますか 魔法の効きが悪そうなので出来れば無視したいわけで」

「ボクがやるよ でも魔法である程度の誘導はしてね？ 真っ直ぐでしか必殺できないから」

「俺は見てるからがんばれ」

アラマキが黒い球を射出して追跡してくる竜の行動範囲を狭める。  
イコはかわいい。

「よいしょっと」

「え？ あっ、避けられました！！」

イコが憑きだした右手の先の空気が歪み、黒い砂を撒き散らしながら一直線に竜へと向かう。  
竜は腕を斬り飛ばされながらも回避して向かってくる。

「どうしようか あ、振ればいいのか」

避けられて困っていたイコが思いついたように腕を振り下ろす。  
真つ二つに分かれた竜の死骸が墜落し、次第にその影は遠退いていった。

「ええと、何をやったのでしょうか」

「ギフトで向こうまで分解したって感じかな　直線だし、速度も遅いけど魔力分解してるし切れ味は抜群だね」

ギフトの範囲を伸ばして攻撃したらしい。  
イコのギフトも便利そうで羨ましい。

「非常識が私を責めたてるの　ねえ、エリス　私はどうしたらいいの？」

「首元にしがみつくなよ　エリスが嫌がつてるだろ」

狼としては巨体のエリスだが、首元にしがみ付かれるのは嫌いらしい。  
首を左右にふって落とそうとしている。

「エリスにも見放されて私ってば可哀相……」

「頭が？」

「うん、頭だね」

可哀相な頭に定評のあるアラマキ。



さすがである。

前回までのあらずじ

アラマキが肉塊になって中央へ行く決意をした。

「私、お荷物ですからね お荷物はお荷物らしく運搬されてみせま  
すよ……」

固く握りしめていた手は震えていた。

飴が溶けるぞ、その一言を俺はかけられずにいたのだった。

……嘘です

「外周……後ろに広がってる森のこと、を抜けたらあとは平穩だから 竜クラスにまで成長した魔物はわざわざ雑魚を狩りに外に出ないからね 経験値の足しにもならないし」

「隣村はここら辺だな」

昔はここまで来るまで物凄く大変だった気がする。

ギフトの範囲外だったので魔物が現れたら石を投げつけて追い払うか走って逃げた。

「あの雨が局地的に降つてるところだよ 未だにマグの魔力があるらしいね」

「まだ降ってんのか　水没してるな」

遠巻きに見ているが凄まじい豪雨だ。

マグの魔力が洗い流せていないらしい。

「詳しく説明してくださいよ　私だけ「うわぁ、すごいあめだね！」としか言えないわけで」

「いや、俺も凄い雨としか言えないが　隣人だったやつが呪われたらしい」

「スキュレイを討伐したらしくてね　魔力が呪われたんじゃないかなって」

こっちは晴れてるのに向こうだけすごいことになっている。  
荒ぶる泥水を見ていたら村があっただなんて信じられない。

「呪術を使う竜ですよ　呪われるとあんなことになるんですか？  
マジですごいですね」

「中央も雨が降ってるかもしれないね」

マグの拠点だしパーティもいるので雨は間違いなく降っているだろう。

雨季とかそういうのを軽々と越えている気がするが。

「解呪してないんですかね」

「竜の呪いだしね 経験値として取り込んだのが未だに呪いを発揮しているのかも」

「竜ってこわいんだな」

できるだけ注意することしよう。  
魔物と竜の違いってあまりわからんが。

「……村長さんは心配しなくてもいいんじゃないかなあと」

「そうか？」

イコがいるから大丈夫ってことだろうか。  
アラマキがまともな事を言うとか雨が降るかもしれない。

「ああ、降ってたか」

「え、何がですか？」

「たぶん、アラマキの血の雨かな？」

「なにそれこわい」

血の雨によってアラマキが感染。  
大量発生したアラマキによる世界滅亡という未曾有の重大事件だ。

「やめとけ アラマキの血の雨とか誰が得するんだ」

「うん、そうだね」

「なんか悲しい 死を回避したのに虚無感しかないわけで」

こびり付いたら落ちなそうだし出血は控えてほしい。  
大地の頑固な汚れになりそうだ。

「もういいです 私はエリスをもふもふして楽しめます」

「じゃあ、俺はイコな」

「ふふ、恥ずかしいよ」

月明かりのように穏やかに輝いている尻尾をもふもふ。  
太陽の下で月を手にしたかのような贅沢に俺の心が満たされる。

「こんな狭い場所で桃色空間を展開するのはやめたまえよ!! 高速移動中なのに嫉妬で死にたくなるじゃないですか!! こんな身投げに最適な場所でそれはいけない!!」

「エリスに齧られてれば身投げしなくて済むけどな」

「煮汁をかけ続けて治って傷ついて、を繰り返すとか」

アラマキが身投げせずに苦しみ続ける方法を考える。  
考えながらも尻尾をもふもふするのは忘れない。

「いつそ龍の核にしてみまうとか」

「動力源、つまり勇者エンジン……いや、アラマキエンジンだな」

『わたしが考えた最強の龍』の中枢になれるぞ」

「もうやめて！！ 私だって生きてるのよ！！ 過去のことではない  
めるなんてよくないです！！」

最強の龍の一部に自分になるとかすごいと思うんだが。  
アラマキになりたいって言ったら全力でサポートするつもりだった。

「ふふ、確かにアラマキも生きてるもんね」

「イコさん……」

わかってくれたんですね、みたいな救われた目で見つめているアラ  
マキ。

尻尾を撫でる手を止めると、寂しそうに擦り寄ってくるその可愛さ  
に昇天しそうです。

「でもね、生きてるから苦しめるんだよ？」

「神は死んだ！！」

いや、神は死なないだろ。

設定でステータスは決まっているが本物は生死の概念、というよりHPがあることすら怪しいのに殺せるとは思えない。

「遠出ではしゃぐのはいいけど落ち着けよ」

「うん、ちょっと騒がしいかな」

「あ、はい すみません でもこのタイミングで素に戻るのはいと思うわけで」

森から出ると魔物を見かけなくなった。

見かけても動きが鈍重すぎてエリスに踏まれて肉塊になっていた。

「魔物って少ないんだな」

「森の狂ったエンカウント率を基準にしないでください 竜と遭遇とか国を挙げての大事件ですからね ちょっと歩いたら竜がそこら辺にいますとかおとぎ話ですよ」

竜籠もあるんだからそれほどのことでもないだろう。

竜籠の竜は養殖品って聞いたし、天然物より弱いのかも知れない。



「へえ」

「興味ないんですね わかってましたよ」

「冒険者が狩っちゃうから竜に至るまで生存できなかったり、格上と戦って勝つような普通とは程遠い生き方をしないとねれないからね」

魔物にも才能があるのかもしれない。  
成長速度や勘、運、向上心といった感じのものが。

「違いがわからなくても大丈夫だよ……たぶん」

「たぶんじゃダメなんじゃ…… 村長さんが気まぐれに迷宮入ったらどうするんですか 攻略するならまだしも破壊しそうですよ」

「ねえよ」

なんて失礼なことを言うのだろうか。  
迷宮に入ってそんな余裕なわけないだろ、半分も攻略できてないって聞くし。

「いや、やりかねません 近道と称して通路を砕いて進み、行き止まりに当たったら地面を掘り進むとか というか迷宮の閉鎖空間で村長さんのギフトを使うとか火力がヤバイ」

「いきなり空から降ってきて家を壊すやつがよく言えるよな」

「龍もおまけだったね」

空から龍とともに落ちてきた勇者とか迷惑すぎる。

シンカイが村に来たときに魔物に襲われて「くっ、なんてレベルなんだ……ここは俺に任せろ……！！」みたいなことを言って泥仕合をしてたけど、原因は魔力を撒き散らして引き寄せたあいつにあると思う。

「アラマキって『遮断』系のスキルないのか」

「そうだね、魔力を流しっぱなしにするのはよくないよ 魔物を引き寄せてしまうからね」

「え？」

勇者だから魔力も膨大だが、垂れ流しはよくないと思う。  
弱い魔物なら近づかないが強い魔物は誘われたように襲ってくるか

らだ。

「なんですかね、それは？」

「アラマキ……」

「無能勇者の名が広がるまではそう遠いことでもなさそうだね」

魔力操作はできていたので『遮断』もすぐに覚えるだろう。  
中央に着くまでに修得するのがアラマキの課題になった。

アラマキの血の雨。  
アラマキエンジン。  
無能勇者アラマキ。

王都グラウス。

なんか伝承があるらしいが俺は知らないので省略。

「どう入ればいいんだ？」

遠くに見えるグラウスの入り方を聞いてみる。  
エリスに乗ったまま突撃してもいいのだろうか。

「エリスは影にしまったほうがいいね 何らかのギフトで龍だとは  
れたら騒ぎになるよ」

「騒ぎというか騎士団やギルドの超上級が全力で駆けつけますよ…  
… あんなに遠いのに徒歩で安心してしまったとか私も疲れている  
のですね……」

エリスを影に縫い付ける。

ギフトの調子が微妙だが一応は機能しているようだ。

「『遮断』できるようになって良かったな」

「飲み込みの早さはさすが勇者って感じだったね」

「え、そうですか　もっと褒めたら伸びますよ　褒められて伸びるタイプなわけで」

「いつもみたいに役に立たないところがすごいと思う　無能さも勇者の中では際立っていて追隨を許さないに違いない　なぜ生きていられるのか、その勇気がすでに勇者の証としか思えない可哀相な存在　歩いていて恥ずかしくないのだろうか　目覚めることに罪悪感を抱かないのだろうか　すごいぞアラマキ、世界中でおまえよりもダメなやつはいないだろう」

「……死にたい　縮んで無になりたい」

「褒めてないよ、それ」

褒めたつもりだったが、違ったらしい。

落ち込んでいるアラマキを無視して進むことにする。

「褒めるのって難しいな」

「ふふ、そうかもね」

ちょこちょこ歩いているイコは歩幅が狭いので俺がゆっくり歩いて合わせる。

まさかこの可愛らしさも間違っているとか……いや、イコの事だから可愛いに決まってる。

「アラマキが襲われてるな　すごい数の魔物だ」

「『遮断』し過ぎたのかも　感じられる魔力の強さが中間くらいになってるから経験値を求めている魔物が狩ろうとしている、かな」

アラマキが剣を振り回すと魔物が片っ端からばらばらに……剣？  
どう見ても剣じゃないんだが。

「置いて行くななんてひどいですよー!!」

「こっちくん　魔物が来るだろうが」

「うん、たくさん来たね」

魔物って強いんだろ、やべえ。

村の周りにいるやつくらい強いって商人を護衛してた冒険者も言  
ってたしギフトを……とか思ってたら鳴き声がうるせえ、石投げつ  
けてやんよ。

「やわらかっ 弾けて貫通したぞ」

「竜を強さの基準にするなど言いたいわけで まあ、無理でしょう  
ね……」

ちょっと面白くなってきた。

投げた石の射線上にいた魔物がばらばらになっていくとか愉快だ。

「こいつらがスライムってやつか 凄く柔らかい液状の魔物って聞  
いた」

「スライムは石が当たった瞬間に蒸発しちゃった魔物だよ 今弾け  
飛んだのはガーゴイルBとマンティコアだよ いろんな魔物が引き  
寄せられてるんだね ここら辺にいない魔物も多いみたいだし」

ちゃんと見てなかった。

スライムを見たこと無いからじっくり観察したかったんだが。

「そんなスライムとかどうでもいいじゃないですか 他に気になることがあるでしょう？ ほら、私の武器とか」

「いや、スライム馬鹿にすんなよ 液状で核が見えてるのに防御手段を持ってないとか凄すぎるだろ 鎧や鱗が無いのに障壁まで張らない 溶解液や毒に体を変化させようとも一切の外骨格を纏わないとか野生で生きられる気がしない 完全に虚弱なのにランクが上がっても無防備とか男らしい 攻撃は相手を飲み込むだけでプレスや魔法を使わないという近接特化なのになぜか防御を捨てている これ以上に気になることなんてねえだろ」

捕えた獲物を体内で溶かすのだが時間がかかりすぎて、襲われたときに逃げられないとかすごい。  
むしろその柔らかさを活かして物理攻撃のダメージを軽減させているという潔さ。

「あ、はい すみません」

「ふふ、外周だと竜種の高等な魔物ばかりだから楽しいんだろうね 障壁を使う魔物が彼の普通だから」



わざとらしい脆さ。

こいつらは低級の、E……いや、F級とかいう魔物だな、間違いない。

「あ、溶けた」

「魔力を解放したらダメだよ 中てられて融解しちゃうからね」

「何もかも間違っているのに正せない……っ！！ 恐るべき非常識……っ！！ 全ての冒険者をあざ笑うかのような暴力……っ！！  
これが圧倒的な力……っ！！」

何かに使えるかと影に入れて置こうかと思ったがやめる。

まだ生きている魔物は素材に適さないし、治療する気も無いからだ。

「外はいいな 何もかもが新鮮だ」

「そうだね ボクは村も好きだけど」

「私も新鮮です スライム蒸発させてガーゴイルに石をぶつけて粉砕するなんて貴重すぎて涙が出るわけで」

機会があればスライムをじっくり見てみたい。

衝撃を和らげる軟体と靄の様に消えるスライム、砕けた岩のようにバラバラになり静かに擬態するガーゴイルB、肉塊として散ったマンティコア……最後は違うが、どれも防御に難があるがめげずに逆に柔らかな身体を活かして生きようとする強かさと強靱な生命力に触れた気がする。

「魔物は奥が深いな 迷宮とかこれより強くて凄いんだろ……冒険者はすごいんだな」

「村人さん、ヤバいですよ ホントにヤバいです 何がヤバいつて、ヤバいことがヤバいんですよ ヤバすぎてどうすればいいかわからないヤバさなわけで ヤバい、ヤバすぎる、超ヤバいの三段階に分けたら確実に超ヤバいですよ」

「うん、ちょうやばいね ボクでも困っちゃうよ」

迷宮に入ったら村に落ちてきた龍よりも強いのがごろごろしているに違いない。

それを相手にする冒険者とか凄すぎる。

「龍よりも強い竜を討伐とかマグも凄いんだな……」

「マグってあれですか 隣人で雨の原因って人ですかね なんです

か龍より強い竜って 俺はスーパードラゴン……意味は自分で考える、みたいなやつですか」

「うん、その隣人で合ってるよ グラウスで探索者をやってるんだって スキュレイを討伐したって前に手紙で書いてあった人 変に勘違いしてるのかも」

「負のスパイラルですね 外周にいたらスクレイくらいの竜はごろごろしてるじゃないですか 下級の竜を石で致命傷を負わせる村長さんに討伐を知らせるとか恥ずかしいくらいですよ もっと……いや、いいです もう私はどうすればいいのかわからないわけで」

S級は化け物って聞いたし、神クラスを憑けても大丈夫に違いない。全力で攻撃してみたい。

「……うん、後で考えようか グラウスに入ろうよ」

「問題の先送りですか…… そうですね、なんか疲れたわけで行きましよう」

スライム。  
しゅごいつー！

俺は絶望した。  
自分の常識、知識、そして世界……すべてが否定されたかのように  
だった。

「くそっー！」

全てを失ったかの虚無感。  
心のどこかで認めてしまい、裏切ってしまったような罪悪感。

「くそ……っー！」

今まで供に歩んできた相棒を否定することになる事実。  
現実はいつだって身勝手だ。

「くそお……」

俺は何も求めていない。  
ただ、信じていただけなのに。

「俺は、無力だ……」

すまない。

俺は君に、謝ることしか出来ない……本当にすまない。

「何やってるんですかね、村長さん」

「本物の薬草を教えてあげただけど……」

金色に輝く君をあんな羨びた葉っぱと勘違いしていたなんて……。  
俺の罪は重い……。

「ああ、私が説明したら「粗悪品を薬草と騙るなっ!!」とか言うて塵にしたので諦めたんですけどさすが村人さんですね」

「うん、そうなんだけど……ちょっと悪いことしたかなって もっと早く教えておけばよかったかもね」

じいさんや父さんが薬草って呼んでいたから俺も呼んでいた。  
つまり俺に非はない。

「明日からもおまえは変わらず薬草だ」

「なんか解決したみたいです」

「ふふ、そうだね 安心したよ」

なんだよ霊薬って。

薬草のくせに気取りやがって。

「まあ、まだいろいろ問題は残ってるわけで」

「うん、困ったね」

そういえばアラマキが剣の代わりに振り回していたモノを聞いてみよう。

薬草は美味しくいただきました。

「アラマキが使ってた武器ってなんなんだ？ 剣とは違った感じがしたんだが」

「あ、気になります？　どうしても聞きたいって言われたら教えちゃうわけで」

「イコ、ちょっと街見たいんだけど一緒に行かないか？」

宿の窓から見える街中は賑わっていて興味をひくものがある。  
アラマキの話を聞くよりもイコと歩いたほうが楽しいに決まっている。

「冗談ですよ！！　お願いですから話を聞いてくださいよ！！  
村から武器の事をスルーされていて寂しかったんです！！　武器を  
自慢させてください！！」

イコがアラマキの姿勢を褒めている。  
ドゲザというらしいが俺も思わず息を飲んだしまった。

「……冗談だ　聞いてやるから落ち着け」

「女の子がそういう格好をするものじゃないよ？」

「ありがとございます！！　なんか負けた気がするけど嬉しいで

す！！」

思わずアラマキの頭に足を置きたくなってしまった。  
凄いモノを垣間見た……。

「気を取り直して、武器はこれにしました」

じゃーん！！なんて言いながら取り出したのは……。  
……？

「……槍、とか？」

「……傘ですよ、ビニール傘」

「これはすごいよ 表面がつるつるしていて普通の傘よりも水をは  
じきそうだし、魔素を取り込んで魔力を発しているからこの傘で精  
製された魔力を受け取ることもできそうだね かなり高等な強化が  
施されているから強力でしかも魔力の通りもいい」

傘ってこんな見た目だったのだろうか。  
イコが興味深そうに眺めている。



「村人さん、この凄さがわかるんですか！？　ただの装飾品のインテリアを鍛冶職のよつこちゃんに鍛え続けてもらったんですよ！！　まさに究極の一！！　積み重ねた素材と時間は贅沢を超えて無駄の域にまで達して完成させたのです！！　ただのビニール傘が聖剣や魔剣に勝るとも劣らない性能に！！」

なんかすごい傘らしい。

聖剣・魔剣と張り合えるとか。

「いや、劣るよ」

「もうがっかりですよ！！　聖剣至上主義には呆れて物も言えません！！」

「おまえも聖剣を持つてるけどな」

「またもや聖剣が私の障害に！！とか叫んでるアラマキを無視してビニール傘とやらを眺める。」

「軽くて長さもアラマキの体格にはちょうどいいだろう、ついでに魔力の通りはかなり滑らかだ。」

「聖剣や魔剣と競り合ったら一発でやられちゃうね　格が足りない過ぎるから圧されて折れるよ　むしろ内包している格でここまで強力にしたのだとするとアラマキの友達の腕はかなりのモノだね」

「なんだ、友達が凄いのか」

「よっこちゃんSUGEEEEEEEE」

よっこちゃんという友達が凄いらしい。  
竜殺しマドラーや破魔スプーンなどを手懸け、剣は一切鍛えないとか。

「エーテル鉱石がもつと手に入れば……」

「まあ、そう落ち込むなよ」

「エーテルを鍬に込めて強化するような勿体ない人に慰められるとか 素材集めをせずに強化する村長さんが憎い」

なぜだし。

ビニール傘にも込めて欲しいのだろうか、丈夫になるし。

「まあ、でも外装の強化に比べて内包している格は低いけどもいい出来だよ 上位の剣よりもずっと強力だね 使っていれば経値を取り込んでそのうち格が上がるよ」

「あ、ありがとうございます 愛剣を片手にがんばります」

剣じゃねえけどな。

斬れないだろうし、刺すのか……振り回して使ってた気がするが。

「ちなみに名前は白染なわけで」

「いや、半透明だろ」

名前負けしてると思う。

そのままビニール傘でいいだろ。

「なんならスケ郎とかどうだ」

「なにそのスケベそうな名前 勘弁してください」

「透け紳士とかどう？ 滑稽で似合ってるよ」

「やめたげて!!」



## 村長の脳内

冒険者「村周辺より離れると魔物が強くなり、迷宮に出現する魔物は凄く強い」

魔物 弱い 竜 強い 龍 強い 迷宮の魔物強い

つまり、魔物<竜<龍<迷宮の魔物（、・・・）キリッ

「種族、国、スキル、ギフト、魔物、冒険者、ギルド、クエスト、アイテム、そしてシステム…… これ以外にも世界には多くの物事であふれているんだ 説明しなければならぬことは多く、教えていることは少ないよね だから今日は魔法を教えようかと思ってんだよ」

「使えないんだが覚える必要あるのか？」

「うん、もちろん 知識があるだけでもかなり違うよ マグも、というか村で生まれた若者は総じて世間知らずだから外に出た場合は四苦八苦しているんじゃないかな」

魔法を使えないんだよな、俺。

魔力を伝える器官がまるつきり無いとかイコが言っていた。

「魔法の知識はあったほうがいいですよ 戦闘で襲われたとき魔法を使われたらどうするんですか」

「石を投げつける」

「……マジでやりそうだから困る そして発生した魔法を破壊しそうです 魔導師も研鑽を積んだ努力の結晶を道端の石ころで対処される日が来るなんて夢にも思わないわけで」

『魔弾』スキルを持つてから通常攻撃と同じ命中率で持ち上げられるモノならどんなモノでも投擲武器に出来る。

だが上位の冒険者が相手だったら厳しいかもしれない、やつらは化け物らしいし。

「じゃあ、防がれたらどうするのかな？ この前みたく障壁や防御系のスキルで」

「それはどうしようもないな 逃げる、とか？」

「……なんですか、そのガチムチ魔導師 あの石の威力を前にしたら障壁とか紙屑ですよ 防御系スキルなんて『見切り』があるかどうか あの石を防ぐとか前衛職でも一部でしょう なぜ未だに街中

で平穩に過ごせているかわからないわけで」

走って逃げ切れるのか。

魔力を撒き散らして輝く魔導師に追いかけられたら俺は死ぬかもしれない。

「逃げ切れなかった場合は戦うしかないでしょ？ その時にどんな魔法を使っているかわかるだけでも有利になるよ 使える属性、信仰、どれくらいのランクの魔法が使えるか、魔力の上限をわかるだけで戦いが楽になるね」

「なるほど」

「……エーテル解放か魔力解放で倒せますね 廃核か廃魔を防いでガス欠して死ぬわけで えげつないです」

ほとんどの情報は『核識』でわかるので知識を得ておけば勝機を見いだせる。

つまりそういうことなのだろう。

「魔法も国や場所によって異なり、種類も様々だから一般的なモノを説明していいこうか 魔法は魔法スキルに分類されていて、大きくわけると詠唱魔法と陣魔法の二つだね」

「大まかに詠唱・祈祷・呪術の詠唱型、円陣・紋様・転記の陣型として種類わけができます 魔法としてよく知られているのは詠唱型ですね これは呪文を唱えて魔力を信仰先に渡せば現象が発生します 陣型は魔力を込めた文字や図形を描くことで詠唱と同じく現象を発生させます」

詠唱は独り言を発して魔法を発動、陣はお絵描きして魔法を発動ということか。

神経質な仲間に怒られたりしないのだろうか……「遊ぶな！！ S級スライムに溶かされるぞ！！」みたいな。

「うん、そうだね それで魔法の属性は信仰する妖精によって変わるんだよ 雨妖精だったら水、炎妖精だったら火といった感じだね 火が第一、水が第二、土が第三、風が第四元素、という感じに属性が分かれているよ 魔法や信仰の形は様々だけど、魔力を差し出して現象を引き起こすのは共通している事柄だね」

「神様は信仰していないのか？」

「できるけどほとんどしてないと思うよ 威力は高いけど、膨大な魔力とエーテルを犠牲にするからね 第五元素魔法を使うのは暇を持て余すほど稀有な才能を持っている魔導師か、かなりの物好きくらいだよ」



「私は全部の属性が使えるので第五もいけますよ!!」

アラマキが稀有な才能……？

いや、暇を持て余す物好きだろう。

「詠唱型は似てるようなものだけど、結構違うんだよ 詠唱は声に出すからいろいろと判断がつくけど、祈祷は念じるから見た目ではどんな魔法か判断がしにくいんだ 呪術は術者が全く動かなくなったら発動するから慎重に見極めれば大丈夫……かな？」

「陣型はわかりやすかもですね 円陣は魔導師の足元に展開された円陣内に書かれた文字を、紋様は術者が描いた記号で判断します 転記は魔導書などの魔導具に魔力を込めたら発動するので早くて厄介ですけど一冊に書いてある魔法の種類は少ないので臨機応変につてところですね」

多いな……。

というか準備されたら詰むような気がする。

「魔法を使ってくる敵と経験を積むのが一番の対処法だけどね」

「戦わないのが一番だろ、魔法って怖いし 村にいたときに金色に輝く泡みたいなのを使われたけど死ぬかと思った 神様ありがとう」

「……今となつては村長さんに常識を説くのが間違ひなのではないかと私は思うのです 何と戦つたか知りませんが『エンジェル・ソング』とか普通は龍も死にます 『天使』級はマジでヤバイ」

黒い羽根が生えた皮膚が黒ずんで爛れた翼人……いや、村にいた翼人たちとは違うもつとおぞましい何かだった。

そのときは神級が憑いて黒いやつの魔法が脅威にならずにすぐ戦闘は終わったが、イコから

一日中離れずに一緒に寝たのを覚えている。

「使える人はいないと思うけど……あ、アラマキが使えたね 魔法の原型とも言える

神代術……つまり古代魔法だね 天地開闢から始まる神話を再現する魔法で、天使の召喚や神の一部を顕現できるモノもあるらしいけど 必要な技術が今では失われているし、魔力も膨大でヒトには扱えない術だよ 発動すらできない奇跡の領域だね」

「私つかえますよ!! 見たいですか!? なら王城を火の海にしますよ!! 必ずろさせてください!! 偉い奴らなんてみんな死ね!! 私を利用しようとしたやつらも貴族もみんな死ね!! これから毎日城をバーベキューしますね!! BBQ!! BBQ!!」

「誰だよ、アラマキを勇者にしたの 危ないだろ」

アラマキは落ち着きがないやつだ。  
びーびーきゅーとか全くわけがわからない。

「ほら、落ち着けよ」

「ゆっくり呼吸しなよ ほら、ね？ 吸って、吐いて、吸って……」

「B B……あ、はい すー、はー、すー……」

俺とイコでアラマキを挟むように両側に座る。  
高笑いを挙げながら完全に濁っていた目に若干だが光が戻る。

「吸って、吐いて」

「すー、はー」

「吸って、吸って、吸って、吸って、吸って」

「すー、すー、すー、すー、すー……」

ここは息を吸い過ぎてむせる場面だろう。  
さすがアラマキ、勇者は伊達じゃないということか……。

「ふうふうふう…… あのですね、村長さん？」

「いや、落ち着いたらいいだろう」

ジト目で見つめるアラマキから目を逸らす。  
イコはにこにこしていて楽しそうだ。

「まあ、いいですけど」

「じゃあ、いいだろう」

「いいのかな？」

いい？  
いい？  
いー？

「いー？」

「いー？」

「いー？」

「いーいー言っていたが、バカっぽいのに気づいてやめる。  
異様な光景だったが、宿の一室なので問題ない……たぶん。

「いーいー言うのはやめるか……」

「ふふ、ボクは楽しかったけどね」

「楽しかったのか……」。

「まあ、イコが楽しかったのならあと三日くらい続けてもいいのだが。」

「じゃあ、まだやるか？ 三日くらい」

「なんとなくデスマーチ もつやめましょっよ……」

「うん、終わりでいいよ」

「終わりになった。」

終わるって言うのか、これ。

「ところでイコが使ってた魔法ってなんだ？」

「ボクの？」

詠唱しているところを見たことがない。

しかし、陣や魔導具を使っているところも見ることが無い。

「そう、イコの魔法 祈祷とか？」

「ボクは祈らないよ あ、でも君のためなら神にも祈るけどね」

「イコ……」

なんとという可憐な微笑み……。

惚れ直した、俺くらいになると惚れ直し回数は余裕で千を超えてる。

「まあ、詳しく言うと魔力を使って現象を引き寄せてるんだよ」

「村人さんは機人……」

蹴り飛ばされてアラマキが外に吹っ飛んで行った。  
窓際の壁ごと星になったのかもしれない。

「イコ、アラマキが……」

「たぶん、外の空気を吸いたかつたんじゃないかな」

イコが蹴ったのを見ていたんだが……。  
いや、何も言うまい。

「そうか……外は雨が降ってるし 壁、直さないと」

「あ……て、手伝うよ？」

元氣なく耳がぺたんと折れて尻尾が垂れた状態のイコが伏し目がち  
にもじもじしている可愛さと言ったら……。  
アラマキもいい仕事をするものだ。

「私の失言が悪かったですけど、それでも酷いですよー!!」

「化け物が、キサマ」

「村長さんに言われたくないわけで」

蹴られてから間もないのにドアが開き、雨で髪を濡らしたアラマキが帰ってきた。

これから宿の壁はみんなで直そうとしているわけだ。

「龍の羽根とか贅沢すぎるでしょう……」

「大きさにこれしか無かったから仕方ないだろ 文句あるならアラマキが壁やれよ」

「体を張って雨から守るなんてさすが勇者だね」

「ちょ、マジ無理 無理ですから 勇者だって無理なこともありますからね？ 私の身体はそんなに伸びないわけで…… 取れます、腕が取れちゃいますから！！ 内臓が、中身が出ちゃいますから！！ やめてください！！ 私が死んでも第二、第三の私が現れるでしょう…… だから今は許してください！！」

「次とその次のアラマキも壁にしてやるから安心しろ」



「なんとむごい扱いなのでしょう……」

勇者の防壁とかカッコいいな、宿屋の壁だけど。  
雨が入るのは困るので龍の羽根を使って直す。

「これってアラマキの部屋の屋根になってたやつだね うん、これなら壊れなくて済みそうだよ」

イコがにこにこしながら硬さを確かめている。  
壊さないようにしてほしいのだが嬉しそうなイコを見ると俺も嬉しくなってしまうので何も言えない。

「あれあれ、お二人さん なぜか私が壁の一部になって雨で濡れるわけで 早く気付いて助けてください なんて私を触って壊れなくて済みそうとか言ってるんですか なんて桃色空間を…… 無視ですか、そうですか うわああああああん!!」

## 王都グラウス

ルア・ルカ国の王都で街全体が防御壁に囲まれている。

中央門から王城へ伸びている大通りから外れると迷路のように入り組んだ裏道へと繋がる。

緊急時には魔法障壁が街全体を覆うように展開し、特別な強化が施された城壁は金色に輝く。

名前の由来は使徒の迎撃時に拠点として利用された前衛要塞グラニスの防御壁を城壁に組み込んだことから。

俺は中央に目的があって訪れた。  
それは勇者を探すことだ。

「……」

『ヒノの後継者』を使えばすぐに勇者は見つかるだろう。  
問題は金だ。

「金稼ぎしたほうがいいのだろうか」

三人の宿暮らしは大変です。

毎日お金が出ていく。

「……冒険者ギルドで日銭稼ぐとか？ 素材を売るとか？ 賢者の石シリーズを売るとか？ 無理でしょう、どれも大事件にしかないわけで」

「表出る」

「いや、だって村長さんだし？ ……ギルド行ったらプチツと殺しそудだし、素材は龍や竜の部位で大混乱、賢者の石はおるか霊薬ですらエーテルの濃さで街中の一般人は死にます まさに無差別テロなわけで」

俺だって普通に仕事できるから。  
もしかして煽られてんのか。

「大丈夫だよ、ボクに考えがある」

「さすがイコだな」

「……とても心配です」

イコは頼りになる。

アラマキは表出て雨に濡れてる。

「取りに行こうか ふふ、かなり肥えてる頃だからね」

「取りにつてどこにだ……」

「まず肥えてるってなんですか……」

にこにこと笑っているので邪魔しないでおく。  
一緒に行けばわかるだろうし。

「あ、私は行きませんから …… 目を離すところですけど」

「へえ なんか用事でもあるのか」

「情報収集ですよ、じょーほーしゅーしゅー ファンタジーと言ったら酒場に行つて話を聞くのが定番でしょう!? ここの店主のおじいちゃんに聞いたほうが正確なんですけど、酒場で聞いてみたいわけで」

アラマキの言うファンタジーの定番って誰が決めているのだろうか。

空から落ちる、勇者はバカ、無能、などが定番とか……異世界から無理矢理呼ばれるのに大変だよな、勇者って。

「付いて行ってやろうか？」

「いや、全力で遠慮します 情報を聞きに行ったのに場所が無くなるとか勘弁してください」

なんでこいつさっきから煽ってくるんだ。  
聞きに行けなくしてくれってことか。

「なんとという殺気……っ！！ 死が這い寄ってくる……っ！！ 濃  
厚……っ！！ 濃密……っ！！ ただひたすらな恐怖……っ！！」

「うるせえ」

「うわわわわ……」とかやってるアラマキの頭を叩く。  
ちよっと涙目になってるが今のはこいつが悪い。

「すごく痛いわけで…… とりあえず私は先に行きます ビニール  
傘をここに置いておくので使ってくださいねー」

「おう」

「酒場が私を呼んでいるのよ!!」とか馬鹿丸出しで出て行ったアラマキを思考の片隅に追いやり、イコと話そうと……。  
鳥……？

「イコ、なんだそいつ　鳥か？」

「うん、ボクの同胞ってやつかな　ちよつと情報を聞いていたんだよ」

イコの手に乗っているのは小鳥の形をした何か。  
目や口は無く、時折水のように波打つ体をしており、内部に核だと思われる小さな球が漂っている。

「ああ、イコの仲間か　持て成さないとな　俺特性のお茶と菓子とかどうだ？」

俺自慢の特製品は金色に輝いているのが特徴だ。  
成金趣味っぽいのが欠点かもしれない。

「ちよつと強すぎるかな　ちぎった葉の一部を水出ししてくれれば十分だよ」

「そうか こんな感じでいいか」

取り出した少しだけちぎった薬草を水に浮かべる。  
浮かべるだけで水が金色に輝くから不思議なモノである。

「うん、それくらいがちょうどいいね」

「それはよかった」

皿を取り出して飲みやすいように移し替えようとしたら小鳥もどきが水に潜ってしまった。  
えっと……。

「魅力的だったみたいだよ、君の育てた薬草を浮かべた水は」

「そ、そうか……」

ちょっと驚いたが小鳥もどきが頭だけ出して浸かっている姿は和む。  
水を全部取り込んで金色に輝いている姿には言葉が出なくなった。

「格がかなり上がったね クラスも上がりそうだよ」

「そうなのか？」

ピカツと輝いてどことなくキラツとしている小鳥もどきはクラスアップ直前らしい。

よくわからないが俺の周りを軽快に飛んでいる。

「ふふ、懐かれたみたいだね 仲良くなってくれてうれしいよ」

「まあ、悪い気はしないな」

俺の肩に乗ったまま羽根を休めた小鳥もどきを見て、苦笑い。

『歯車の心得』、『螺旋回し』の称号と『自律玩具・偽』のスキル、『魔獣使い』、『鳥使い』のジョブを取得した……また何かが起きたらしい。

「そろそろ行こうか 取りに、ね？」

楽しそうに部屋を出ていくイコを傘を持ってから追いかける。宿屋のドワーフのじいさんに外に行くことを告げて外に出る。



「場所はわかってるのか？」

「うん、まかせてよ」

雨の中、雑踏をイコと歩く。

黒いローブを被った女がビニール傘に興味を示してこちらを見るが、顔を蒼くした後に逃げるように裏道へといなくなった。

「普通の傘だよな」

「そうだね 普通のびにーる傘だね」

珍しいけど逃げるようなモノじゃないだろう。  
失礼極まりないやつだ。

「あ、濡れてるよ」

雨でイコが濡れないようにしていたのだが、俺の腕が湿っていることに気付いてぴったりとくつついてきた。

ちよっと恥ずかしいが腕に感じる柔らかな温もりとかなんというこ  
褒美。

「耳と尻尾は隠してるのか　もったいないな」

「ふふ、ごめんね　でもこの国は人間が優遇されてるからヒト攫いとかに絡まれたら大変でしょ？」

イコと目が合ったやつは片っ端から石を投げつけたほうがいいのかもしれない。

美しさに目が眩んで何をしでかすかわからないからだ。

「優遇されるほど人間が凄いとは思わないんだが」

「ルア・ルカは人間が主導してるからね　隣のエーデルフィアは信徒連つて宗教が力を持ってるし、逆隣りのインシロフは獣人が、タデルは翼人たちが実権を握っているんだ　つまり国の偉い人の種族が関わっているし、人間って多いからどこの国にも良し悪しどころにも影響があるみたいだよ」

数こそが力つてことだろうか。

イコは凄いのだから獣人のほうが優れていると思うが、そう簡単なことでもないのだろう。

「ここら辺は人が少ないんだな　綺麗というかなんというか……」

「富裕層が暮らしている区画だからね」

金持ちは大きいモノが好きらしい。

庭とか屋敷とか広過ぎて何かあったときに対処できないだろ。

「じゃあ、入ろうか」

「ここか」

成金ですって喧伝してるかのような悪趣味の豪邸。  
門から入らず裏からお邪魔します。

「ここはキンドって商人の家だよ」

「ああ、村によく来てた」

護衛の冒険者を数人ほど引き連れて薬草を買って行った商人である。  
昔は冒険者をしていたらしく魔法も使えるらしい。

「ほら、はした金で薬草を買って行ったでしょ？ だから代金の余剰分を貰いにきたのさ」

「ああ、なるほど」

騙しやがったな、返せ　ってことか。

犬の銅像が吠えながらじゃれ付いてきたが腕を軽く噛まれて邪魔だったのでお座りさせる。

「ホントは村でそのまま受け取れば良かったんだけど、旨みが薄いと来なくなっちゃうからね　しかも村でお金があっても物を高値で買わされて商人に戻すことになるだけだから無駄になっちゃうんだよ　今なら村から持ち帰った物を高値で売って財産を溜めこんでいい感じに肥えてると思うんだ」

「言っても素直にもらえるとは思えないが」

遠くで小鳥もどきに犬が腹を見せていたが、小鳥もどきに捕食されていた。

後で小鳥もどきの名前を決めよう、呼びにくいし。

「押し入って勝手にもらっただけだよ　君のモノだったんだから問題ないね　むしろ今まで我慢してたのを褒めて欲しいくらいだね」

「そ、そうか」

イコが言うのだからいいだろう。

俺は勇者のことを盗人って言えないかもしれない。

「気にしなくても投資しただけだと思えばいいよ 餌をあげて肥えさせて回収するってだけだからある意味では家畜みたいなモノさ」

「イコはいろいろ考えてるんだな」

「ふふ、楽しいものだよ」

俺も薬草にエーテルを与えて育てて食べるから同じかもしれない。  
鳥もどきが犬を取り込んでるのだが大丈夫なのだろうか。

「あの鳥っぱいのに名前は付いてるのか？」

「型番とかなら……名前はないから付けてあげたら喜ぶんじやないかな」

鳥もどきが家の中から現れた男を悲鳴もあげさせずに取り込んでいる。

さすがに人間は大きさに無理だと思ったが案外イケるらしくぺろりと飲み込んでしまい、男の姿はなくなった。

「鳥もどきだしモドキとか……いや、ニクスにしよう」

「うん、いい名前だね」

狼のエリス、龍のシャロン、鳥のニクス。  
なんかかわいい気がする。

「ここだね 宿でニクスが教えてくれたんだよ」

「そうなのか」

扉がぱきつという音を立てたがどこも壊れてないと思う。  
ちよつと力を入れてねじ曲がってしまったが、大丈夫だ。

「貯めこんでるね ギフトにいれちゃっていいよ」

「じゃあ、いただきますっ」と

影に片っ端から縫い付けている今の気分は宝を見つけて袋に詰め込む盗賊だ。

ニクスの飛んで行った方向から数人の悲鳴が聞こえた。

「あ、魔法だね　これが詠唱魔法だよ」

「逃げたほうがいいか？」

キンドが詠唱して魔力が放出されている。

詠唱の内容は妖精にお願いしているような言葉なのに、強制しているような印象を受けた。

「対処法を知っていたほうがいいから受けてみようか　渦巻いてる魔力が赤いから第一、つまり火属性だね　魔法を使われたら魔法で相殺するか、障壁を張って減衰させるかだけど　これの威力は大したことが無いから魔力をちょっとだけ当てるだけで十分だよ　やってみてごらん」

「なんか怖いな……」

部屋が埋め尽くされるほど大きな火の玉が飛んできた。  
威力はシヨボいらしいので軽く魔力をボツと出してみる。

「ちょっとあつたかくなつた」

「今のが『ファイヤ・ボール』だよ 咄嗟の時はそんな感じで防げばいいからね」

防ぐとぬるい風が通り過ぎるだけだった。

キンドは俺とイコの顔を見ると青ざめていたがどうしたのだろうか。

「みたいな感じでお金を取ってきたよ」

「なんという…… 手段をもっと詳しく聞くべきでした…… 取ってきたというか『盗ってきた』わけで」

なんだか落ち込んでるアラマキを無視してニクスに薬草を与える。  
帰ってきてからも水、薄めたお茶、お茶、薬草の一部と取り込み続けていて食欲旺盛でかわいい。

「……その商人は殺してないんですか」

「殺してないよ でもそのうち遊びに行くって言ったら焦ってたね」

手のひらほどの大きさで鳥形をしているが身体そのものは金色の水っぽい何かで構成されていて内部には核が漂っているニクスを眺めていた俺は気付いた。



ニクスは本物のスライムなのでは、と。

「ギルドマスターでしょう？ 憲兵とかが捕まえに来るんじゃないですか？」

「当分は来ないだろうね ギルドにとって信頼は活動するうえで最も重要な要素なのにマスターの自分が盗みに入られたなんて汚点を声高々にして言えるわけないよ 名も知れないコソ泥に入られたマスターが運営するギルド、なんて噂が流れたら潰れちゃうからね それでなくても薬草、つまり霊薬には黒い噂が絶えないのに万が一にでも所持していることが現場の調査などで情報が洩れて他のギルドにバレたら何が起きるかわからないよ しかも闇ギルドなんて過激な集団が薬草を売っている根元を狙っているみたいだし 何処に流しているかは知らないけど秘匿は完璧だったね ボクらはあれの人生を断てる状態だから内密に処理しようと行動するだろうけど、お金は貰ってきたから財で解決はできない 取れる手段は脅すか攫うか、そんな単純なものしか選ばないんじゃないかな でも、そうになったら面白いと思うよ……ボクが」

「もうどうにでもなればいいんです…… でもギルドに村の場所がバレたらどうするんですか？」

「森を突破した冒険者はシャロンが出迎えてパクツと食べてくれるよ 手が足りなかったら昔創った彼の作品も大盤振る舞いしちゃおうかな 商人は必要だったから不干渉だったけどもう要らないからね」

「うわぁ、いい笑顔……」

犬や人を溶かして取り込むスライムのニクスは大きさや形が自由に  
変えられるので鳥や犬、それよりも大きなモノにもなれるのだから  
凄い。

イコは楽しそうに笑っているが、アラマキの頬が引き攣っていたが  
何かあったのだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4740w/>

---

けんむす

2011年10月7日23時02分発行